

大阪狭山市文化財報告書5

太満池南窯・北窯発掘調査報告書

1991.3

大阪狭山市教育委員会

はじめに

本報告書は、大阪狭山市北端の太満池の岸に所在する2基の須恵器窯の発掘調査報告書です。

太満池は、開発のために約半分が埋め立てられることになりましたが、それに先立って実施された発掘調査によって、須恵器窯と多くの遺物を発見することができました。本市には多くの須恵器窯がありますが、これまでに本格的に発掘された例は少なく、今回の発掘成果は貴重なものとなりました。その成果を公表させていただくことが、本市の文化財の普及、啓発の一助になればと、このたび報告書を刊行いたしました。調査にあたりましてご指導、ご協力いただきました各位には心からお礼申し上げます。

本市教育委員会としましては、今後も文化財の調査、保存、活用に努力する所存であります。皆様方の温かいご理解とご協力を願い申し上げます。

平成3年3月

大阪狭山市教育委員会

教育長 上谷三郎

例　　言

1. 本書は、大阪狭山市教育委員会が、大阪狭山市東池尻所在の太溝池において実施した発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成2年の1月から3月まで行い、その後整理作業を平成3年3月まで実施した。
3. 発掘調査は大阪狭山市教育委員会社会教育課の市川秀之が担当し、整理作業は市川および社会教育課の植山隆司が担当した。本報告書の執筆は太溝池南窓については市川が、太溝池北窓については植田が担当した。
4. 調査にあたっては次のかたがたの参加・協力を得た。

若宮美佐、安有美子、吉本和美、井上昌代、鬼塚理子、川口真之、津野忠之、山崎和子、桜潤繁太郎、井穴俊一、高林正男、松川友和、溝端竹一、山本完子、高林美津枝、松木昌子、西田紀佐子、太田八重子、荒瀬志摩子、樹井つやみ、松本明子、植田三知子。

本文目次

(頁)

はしがき

例　　言

調査に至る経過	(市川)	1
調査地周辺の歴史的環境	(市川)	1
太満池89-1区発掘調査報告	(市川)	5
1. はじめに		5
2. 太満池南窯		5
遺構		5
遺物		7
太満池89-2区発掘調査報告	(植田)	18
1. はじめに		18
2. 近世遺構		18
遺構		18
遺物		18
3. 太満池北窯		22
遺構		22
遺物		23
小結		25
まとめ	(市川)	29

挿 図 目 次

(頁)

第1図 大阪狭山市内埋藏文化財分布図	3
第2図 調査地位図図	4
第3図 T I M89-1区、太満池南窯灰原平断面図	6
第4図 太満池南窯灰原出土遺物(1)	9
第5図 太満池南窯灰原出土遺物(2)	10
第6図 太満池南窯灰原出土遺物(3)	11
第7図 太満池南窯灰原出土遺物(4)	12
第8図 太満池南窯灰原出土遺物(5)	13
第9図 太満池南窯灰原出土遺物(6)	14
第10図 太満池南窯灰原出土遺物(7)	15
第11図 太満池南窯灰原出土遺物(8)	16
第12図 太満池南窯灰原出土遺物(9)	17
第13図 T I M89-2区、近世遺構・太満池北窯平断面図	19
第14図 溝1土器出土上状況	20
第15図 土坑上層断面図	20
第16図 近世遺構出土遺物	21
第17図 太満池北窯燃焼部平面図・土層断面図	24
第18図 太満池北窯出土遺物1(燃焼部床1・床2堆積層)	27
第19図 太満池北窯出土遺物2(燃焼部床2堆積層)	28

表 目 次

(頁)

第1表 太満池南窯出土遺物観察表	31
第2表 太満池北窯出土遺物観察表	44
第3表 太満池南窯杯蓋形態分類表	53
第4表 太満池南窯杯身形態分類表	54
第5表 太満池北窯燃焼部床1杯蓋形態分類表	55
第6表 太満池北窯燃焼部床1杯身形態分類表	55
第7表 太満池北窯燃焼部床2杯蓋形態分類表	56
第8表 太満池北窯燃焼部床2杯身形態分類表	57

図版目次

- 図版1 T I M89-1 a. 太満池南窯灰原
b. 太満池南窯灰原土層断面
- 図版2 T I M89-1 a. 太満池南窯灰原
b. 太満池南窯
- 図版3 T I M89-1 太満池南窯灰原出土遺物(1)
- 図版4 T I M89-1 太満池南窯灰原出土遺物(2)
- 図版5 T I M89-1 太満池南窯灰原出土遺物(3)
- 図版6 T I M89-1 太満池南窯灰原出土遺物(4)
- 図版7 T I M89-1 太満池南窯灰原出土遺物(5)
- 図版8 T I M89-1 太満池南窯灰原出土遺物(6)
- 図版9 T I M89-2 a. 近世遺構 溝1土器出土状況
b. 近世遺構 土坑
- 図版10 T I M89-2 a. 近世遺構 溝2・溝3
b. 太満池北窯燃焼部(調査前)
- 図版11 T I M89-2 a. 太満池北窯燃焼部(床2直上)
b. 太満池北窯燃焼部(床2直上、東上方より)
- 図版12 T I M89-2 a. 太満池北窯燃焼部床2遺物出土状況(東上方より)
b. 太満池北窯燃焼部床2遺物出土状況(北より)
- 図版13 T I M89-2 a. 太満池北窯燃焼部(床1直上・半掘、東上方より)
b. 太満池北窯燃焼部(床1直上・半掘)
- 図版14 T I M89-2 太満池北窯燃焼部出土遺物(1)(床1堆積層・床2堆積層)
- 図版15 T I M89-2 太満池北窯燃焼部出土遺物(2)(床2堆積層)

調査にいたる経過

太満池は大阪狭山市内において狹山池につぐ大池である。太満池の歴史的意義については次章で述べる予定であるが、非常に古く時代に築造された溜池であることは論を待たない。この太満池の東岸に、南北2基の須恵器窯が所在することも古くから知られており、研究者の注意を引いてきた。太満池の約半分を埋め立て、隣接する工場の用地とする計画が出されたのは平成元年の年末のことであった。埋め立てに際して、大阪狭山市教育委員会社会教育課は施主に対し、発掘届の提出を求めるのと同時に、現地の踏査を行ったところ、かねてより本市の埋蔵文化財分布図に記載されていたとおり、東岸の南北箇所において須恵器窯が存在することを、須恵器片の散布から確認することができた。そこで、提出された発掘届にもとづき工事主と覚え書きをかわし、発掘調査を実施することとなった。工事日程との関連で、先に南側の窯跡の発掘工事を行い、終了後北窯の発掘工事を実施した。発掘期間は南窯が平成2年1月5日から1月22日まで、北窯が2月15日から3月31日までであった。その後平成2年度にコンテナ約100杯分におよぶ出土遺物の整理作業を行った。また太満池内の須恵器窯以外の遺跡分布状況を把握するため、池内の数箇所において重機を用いたトレーナーを掘削し、断面の観察を行ったが、池による堆積は意外にも浅く、すぐに地表面にいたった。遺構、遺物等は確認できなかったので、調査の主体を東岸の2基の須恵器窯に集中して、発掘を実施した。太満池の歴史自体を考えるには、北堤の断面を観察することがもっとも有効であろうが、今後も池の半分は貯水のために利用されることとなっており、堤については現状変更がなされないため、その部分の調査は行われなかった。

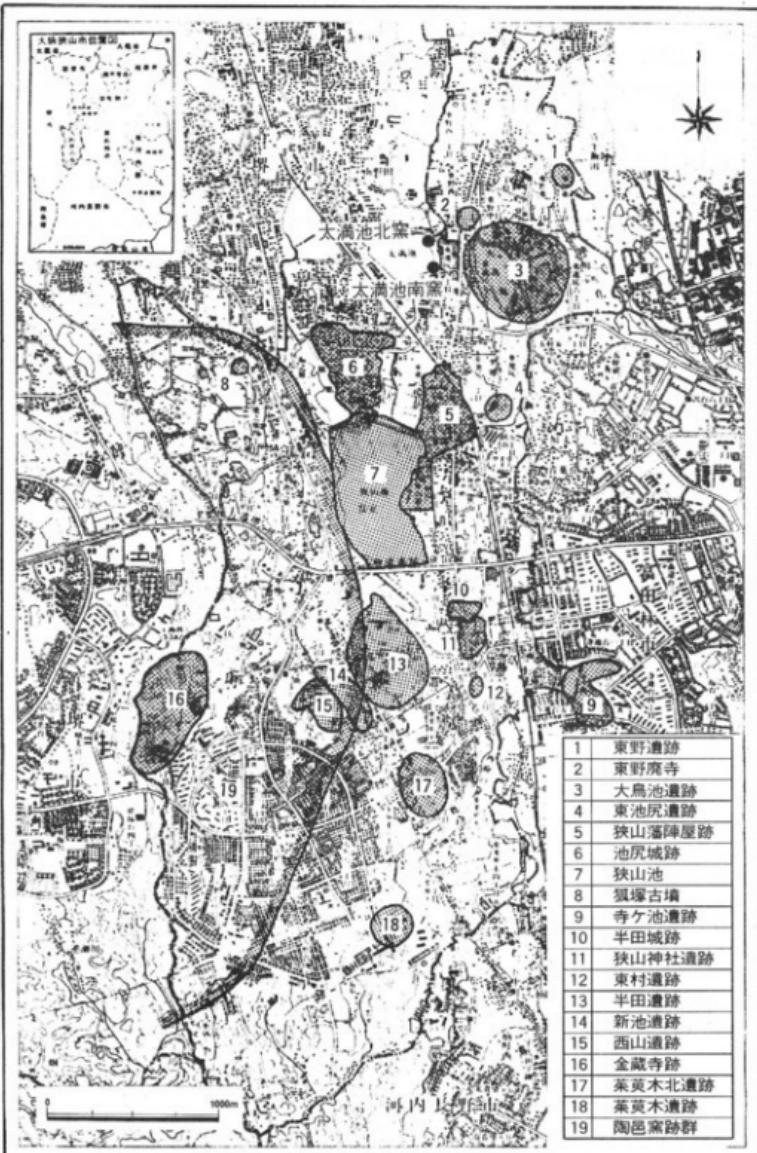
調査地周辺の歴史的環境

今回発掘した2基の須恵器窯周辺の歴史的環境を述べるにあたっては、まず太満池についての説明をもってその端緒とするのが妥当であろう。太満池はタイマイケと読む。太満池は狹山池の北方約1kmに位置する。狹山池の築造は南河内の開発史にとって大きな画期であったが、その時期についてはいまだ定説がない。近年の狹山池ダム化工事に伴う文化財調査によって、6世紀の後半から7世紀にかけて築造された可能性が示されているがその見解についても今後検討の必要があるだろう。^① 太満池はこの狹山池のすぐ下位に位置し、狹山池中樋から流れ出た水をいったん溜め、さらに下流の諸村に分配する機能を担っている。その意味において太満池の歴史は常に狹山池のそれと一体のものであったということができるだろう。さて太満池が文献に登場するのは『續日本紀』天平4年の「築河内國丹比郡狹山下池」という記載である。この狹山下池がどの池を指すのか不明であるが、狹山池のすぐ下にある太満池、大鳥池のうち、東除川につながる大鳥池が狹山池との関連をもったのは比較的新しい時期と考えられ、やはりこの下池は太満池を指すと考えるのが妥当であろう。築造以後太満池がいかなる歴史をたどったのかは明確ではない。白鳳期に

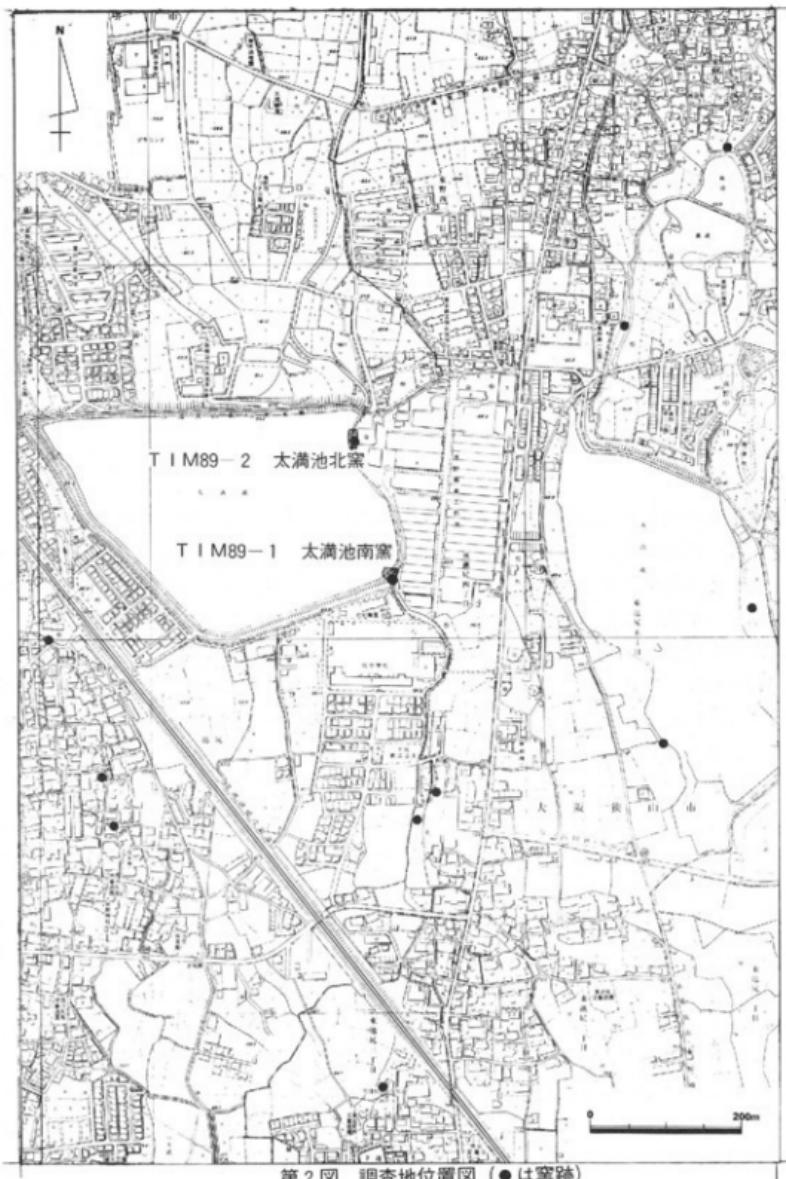
は池の東側に寺院(東野廃寺)が建立されたことが最近の調査から明らかになっている。この寺院は平安期に再興されるが、長くこの地に栄えたようで^⑨、今回の調査でも90-2区において寺院跡かと思われる遺構を検出している。近世には太満池は北野田村、南野田村、阿弥村などの立会池となつたが、下流の諸村へと流れる水もみなこの池にいったん入れられたため水利権をめぐってたびたび水論が起きている。

また、太満池は狭山池と同様に東西の段丘を堤で塞き止めて築かれた溜池である。周知の通り大阪狭山市から堺市南部、和泉市にかけての一帯は古墳時代の我が国を代表する須恵器生産地帯であった。丘陵の斜面を利用して築かれた高藏地区や梅地区の須恵器窯に比べ、大きな斜面に恵まれない、大阪狭山市内の須恵器窯はいずれも段丘崖等を利用して築かれた小規模なもので、狭山池や太満池の東西の岸を構成する段丘崖にも多くの須恵器窯が残されている。狭山池内の須恵器窯と狭山池の前後関係については充分検討する必要があるが、太満池の東岸のふたつの須恵器窯については、池築造以前より経営され、その廢絶後池がつくられたとかんがえるのが自然であろう。太満池東岸の須恵器窯については古くからその存在が知られていた。昭和42年に刊行された『狭山町史 本文編』のなかで森浩一氏は狭山町(現大阪狭山市)内に所在する須恵器窯の一覧を載せられているが、そのなかにはこのふたつの須恵器窯も含まれている。しかしながら今日にいたるまで、これらの窯については散布する須恵器片の採集や、池岸における窯断面の確認がおこなわれただけで、発掘調査が実施されたのは今回が初めてである。以下の調査報告においては南側の窯をふくむ南の調査区を90-1区、同じく北側の窯をふくむ北の調査区を90-2区と呼称することとする。またこれも便宜的な名称であるが、南側の窯を太満池南窯、北側の窯を太満池北窯と呼ぶこととする。

- (1) 狹山池調査事務所 「狭山池調査事務所平成元年度調査報告書」 1990年3月
- (2) 大阪府教育委員会 「池尻城跡発掘調査概要・IV」 1990年3月
- (3) 森 浩一 「土器の生産」 (『狭山町史』1967年11月 所収)



第1図 大阪狭山市内埋蔵文化財分布図



第2図 調査地位置図 (●は窯跡)

太満池89-1区

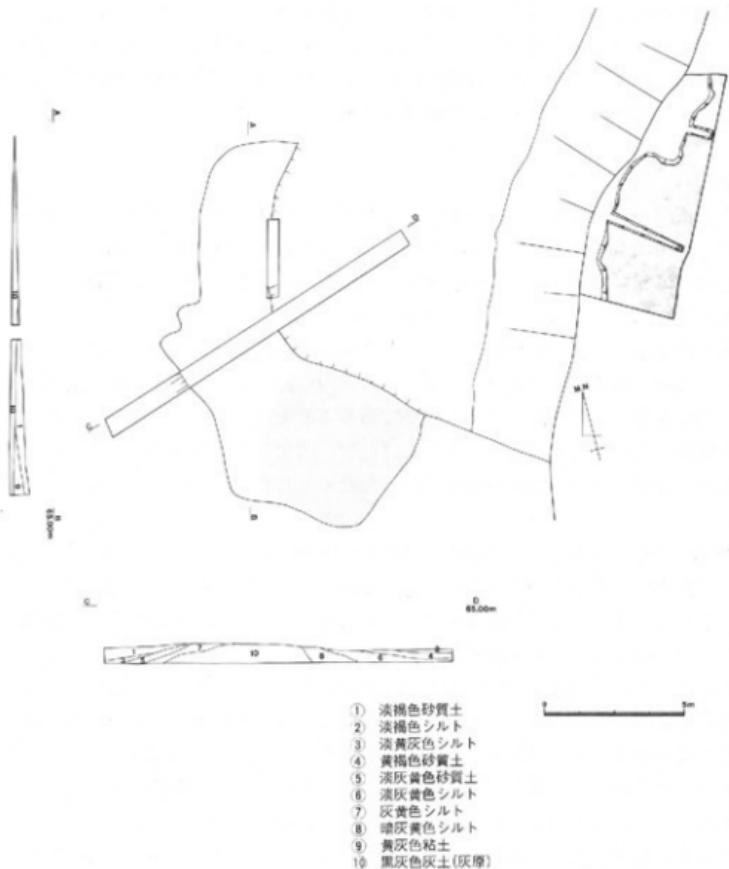
1. はじめに

太満池南窯を主体とする89-1区の調査は、すでにこの箇所の岸が水の浸食などによって相当崩壊しはじめていたため、きわめて難行した。太満池の東南隅にあたるこの箇所においてかつて南側から水路が流入していたことによって、須恵器窯本体はすでに破壊されており、よって今回はかつての本体による焼土の残る箇所と、灰原の一部を調査するにとどまった。灰原が一部しか調査できなかったのは、灰原が今日の池岸の下に相当はいりこんでおり、それを発掘することには相当な危険がともなったからである。また須恵器窯の上には盛土が施されていたが、古墳時代以後の遺構面を確認することはできなかった。よって以後、太満池南窯を中心に調査の結果を述べることとした。

2. 太満池南窯

(遺構)

太満池南窯が築かれた斜面は狹山池の東岸に連続する段丘崖で、南窯のあたりでは崖の高さは約3m程度に達している。須恵器窯はこの段丘を利用して築かれたものと考えられるが、窯本体は後世に築かれた水路によって破壊されており、今回の調査で検出したのは窯焼成部の余熱による焼け土の分布（上部焼け土部と呼称）と灰原部のみであった。上部焼け土の面は池岸の現状地盤から30cmほど盛土をはいだところで検出した。焼け土層の厚さは10cm程度で、南北7.6m、東西2.8m、但し西側には既存の建物がたっていたため東西幅はさらに広がる可能性がある。また焼け土層の下の褐灰色砂質土には須恵器片が混じっており、須恵器窯自体が何度か修復された可能性を示している。現状の地形ではこの上部焼け土層のすぐ西側で垂直な崖になってるが、これは池築造以後の水による浸食によるものであり、窯築造当初にはもっと緩やかな斜面であったと考えられる。灰原部は今日の池底に所在する。南北15m、東西4.8m、もともとは橢円形を呈したものと考えられるが、水路によって削られ、現状は三日月形となっている。灰原部は層厚や遺物のふくまれ具合によって、南北2区に分けることが可能である。北部灰原は層の厚さが10cmから15cmと極端に薄く、遺物も細片がほとんどである。また南部灰原は層の厚さが30cmから40cm程度と厚く、遺物も完形に近いものを含めて非常に数が多くかった。今回図化した須恵器は大半が南部灰原より出土している。また南部灰原は赤灰色の土を多く含み、遺物の出土の多さをあわせて考えると、この部分が窯の焚口直下の場所であることはほぼ確かであるといえよう。なおこの南部灰原は現在の池岸のなかにさらに入りこんでいた。これは池岸がかなり浸食によって崩れ、崩土が灰原の上に堆積していることを示しているが、池岸には池に隣接して建物が建てられており、また土砂の崩壊の危険性もあってこれ以上の調査はでき



第3図 T I M89-1区、太満池南窓灰原断面図

なかった。上部焼け上部と南部灰原との位置関係を考慮するとこの須恵器窯の方向は北東—南西方向であり、長さは最低でも10mはあったことが推定される。また灰原は南北両区ともに一層のみであり、層序からは同一時期に形成されたものとしてあつかわざるをえない。この須恵器窯の灰原を大きく削り、本体を破壊した水路は最大幅4.5mで南西方向から池に流れ込み、灰原付近で大きく北側にまがっている。掘り方ははっきりしており、自然に形成されたものとは考えられない。この水路は砂によってほぼ完全に埋没していたが、一部にトレーニングを設定し掘削したところ深さは最大で0.9mに達していた。遺物には若干の須恵器細片がまじっていたが、比較的新しい遺物が多く、最近まで機能していたことが考えられる。遺物からは掘削された時期は不明であった。

(遺物)

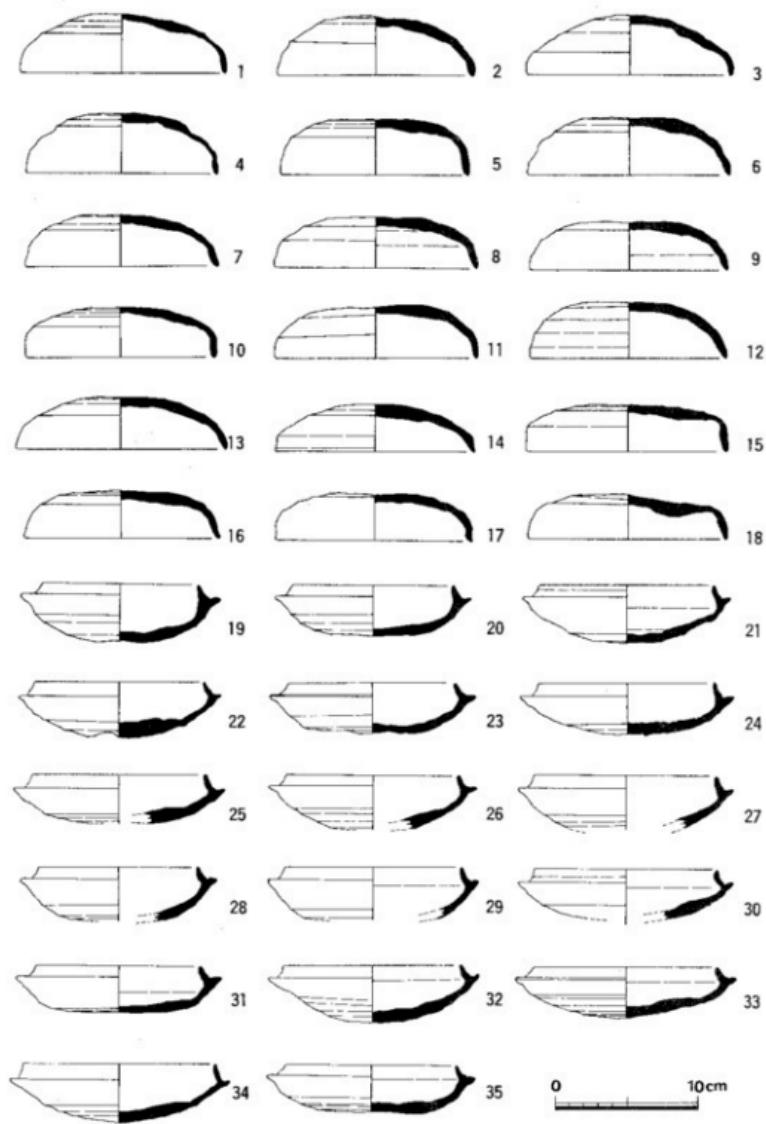
太満池南窯の遺物はすべて灰原から出土したものである。灰原は相当広い範囲に広がっていたが、出土遺物の大半は、窯の焚口付近と思われる南部灰原から出土している。灰原の堆積層には先にも述べたように、明確な層位がみられないため出土遺物は基本的には同一の地層から出土したものとすることができる。

太満池南窯出土の須恵器の器種は、杯蓋、杯身、高杯、甌、提瓶、壺蓋、短頸壺、甕等である。杯身、杯蓋、甕などの数が多いのは市内の他の須恵器窯と同様であるが、提瓶、短頸壺の数が多く、全体的に器種が豊かであることを特色として挙げることができよう。灰原を発掘したため大量の遺物を取り上げたが、図化したのはそのうち118点であった。出土遺物の詳細については観察表をご覧いただくとして、ここではその概要を記すこととした。

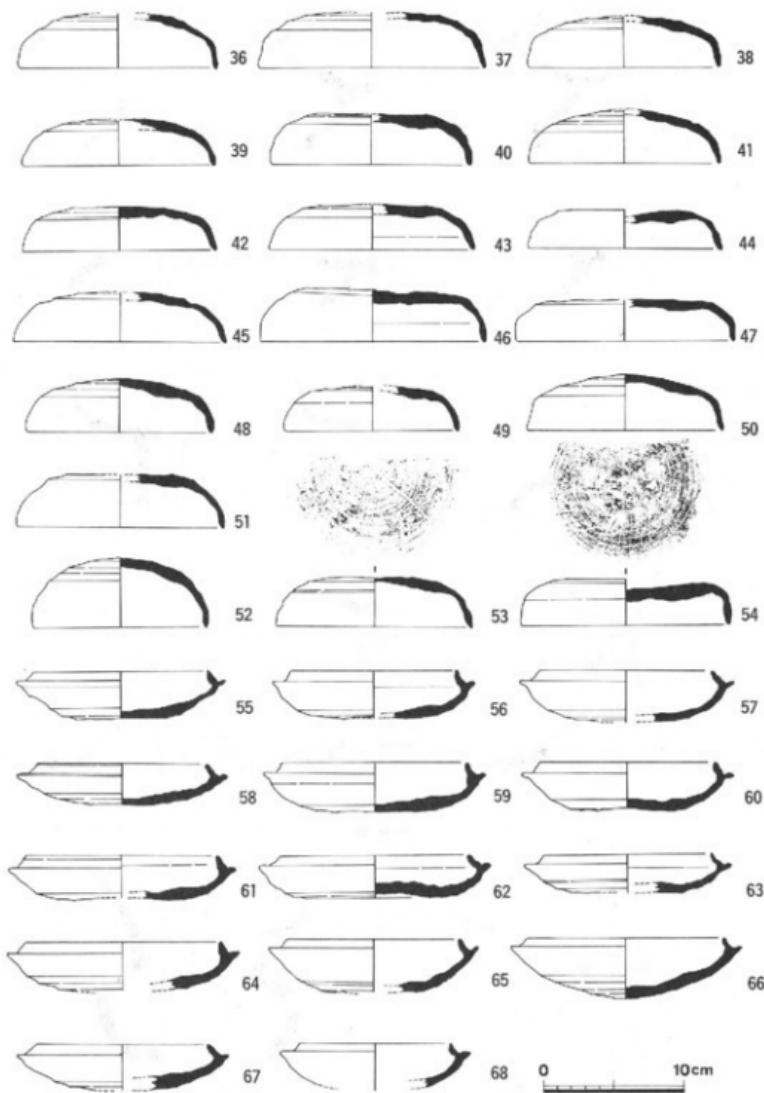
杯蓋は計37点を実測した。口径は12.4cmから16.0cmまであり、稜の痕跡は2、3、などで僅かに観察できるものの大半のものでは沈線すらみられない。ヘラ削りは天井部のみにはどこされる。また口縁端部は丸く仕上げられ段をもつものはみられない。杯身は口径11.2cmから14.0cmまで。たちあがり部は内傾するものと、いったん内傾し立ち上がるるものに分けられる。受け部は水平に伸びるものよりも、やや上方に伸びるものの方が多い。高杯は計14点を実測。有蓋のものと無蓋のもの、あるいは短脚のものとスカシが2段に入る長脚のものに分類できる。甌は1点のみ実測した。ただし口縁端部は欠損していた。口縁部は大きく開くが、波状文等の飾りはみられず、太い沈線が一条施されている。提瓶は5点を実測した。口縁はいずれも若干開き気味で、口径は5.3cmから7.2cm。体部はいずれも回転カキ目を施す。把手は省略が進みカギ形となっているが、86のみは輪状である。88はその口径やかえりの状態から考えて長頸壺の蓋と思われる。89は脚付き長頸壺で脚部が欠損している。体部に2本の沈線が入る。全体的に自然釉がかかっている。91～94は口縁端部が平たくおさまっており、短頸壺の蓋と考えられる。95、96、98、99、100は短頸壺、98はいびつな器形である。口径は7.8cmから11.7cm。97は長頸壺。口縁端部は丸くおさま

り、体部外面にはタタキのちカキ目に入る。101から118は甕。甕は非常に多くの個体数を発掘したが、口縁部が残り、図化したのはわずかであった。口縁は外反してから端部において若干肥厚するものが大半である。口縁部の装飾は104においてカキ目、106、110などで沈線がみられるほかはほとんど施されていないが、115のみはハケ目、ななめ方向のタタキが施されている。

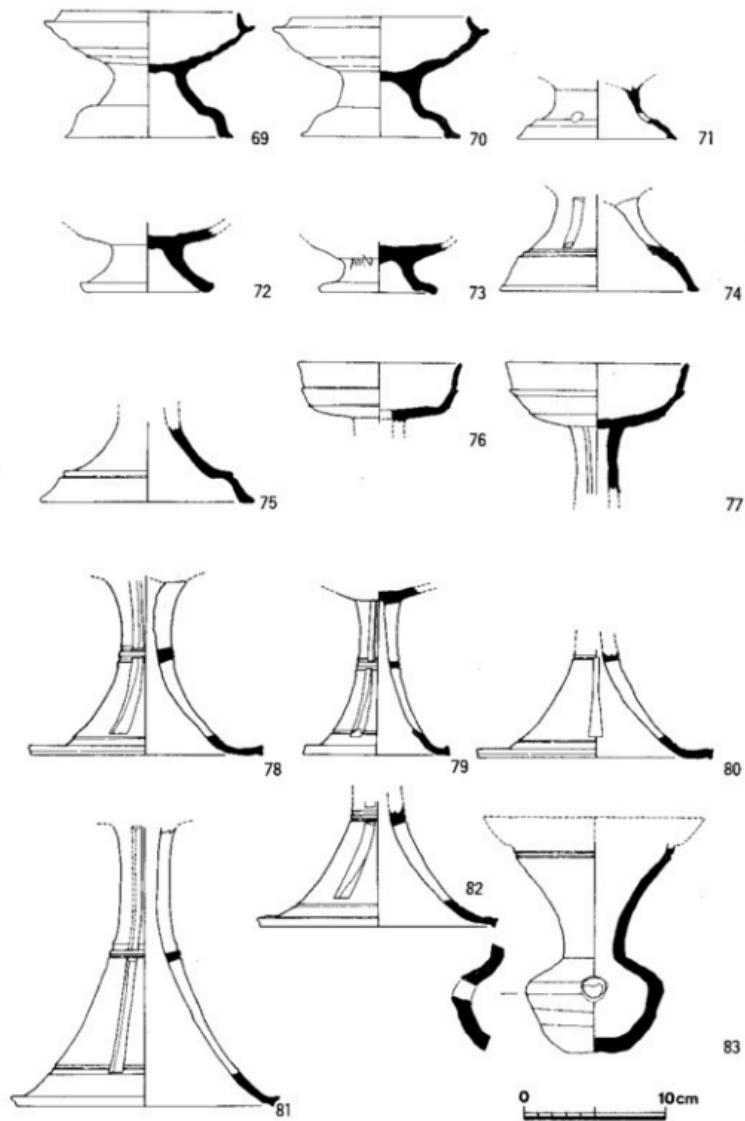
太満池南窯の遺物は、田辺昭三氏の編年によれば、おおむねTK43の枠のなかに入るものとして評価できる。また器種間における時期差もほとんど認めることができないが、杯身のなかには若干TK43に先行する時期のものも含まれており、この窯の経営時期についてある程度の幅を考える必要がある。太満池南窯の遺物は量、器種ともに非常に豊かであり、杯、甕が器種の大半を占めた太満池北窯と好対照を示すものであった。このふたつの窯は時期的にはほとんど同時期に経営されていたものであることが遺物によって明らかであるが、約200mの距離をおいて隣接する窯の間に器種構成の大きな違いがあることは興味深い事実であるといえる。大阪狭山市内の須恵器窯はこの時期のものが圧倒的に多く、今後さらに発掘調査を進め資料を増やすとともに、窯間の器種構成を比較することによって、陶邑窯跡群内のさらに繊かい地域的な特色や、工人達の社会構成にせまることが可能となるだろう。



第4図 太満池南窯灰原出土遺物(1)



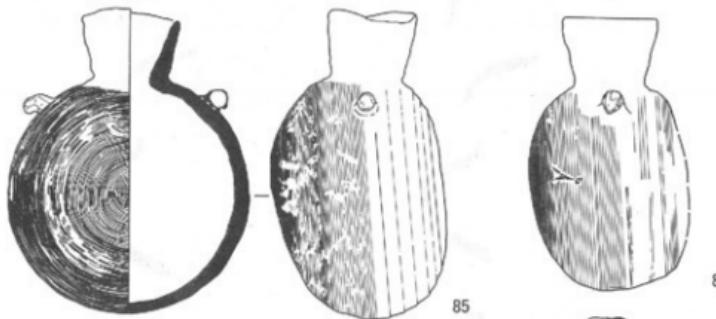
第5図 太満池南窯灰原出土遺物(2)



第6図 太満池南窯灰原出土遺物(3)

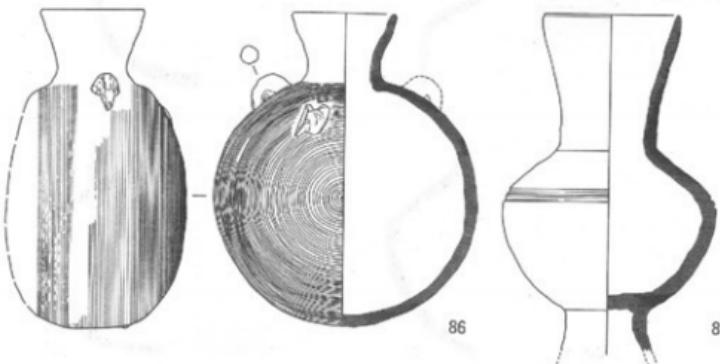


84



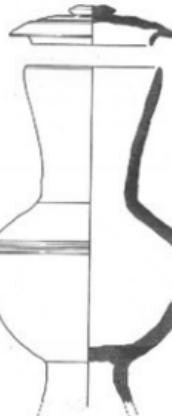
85

87



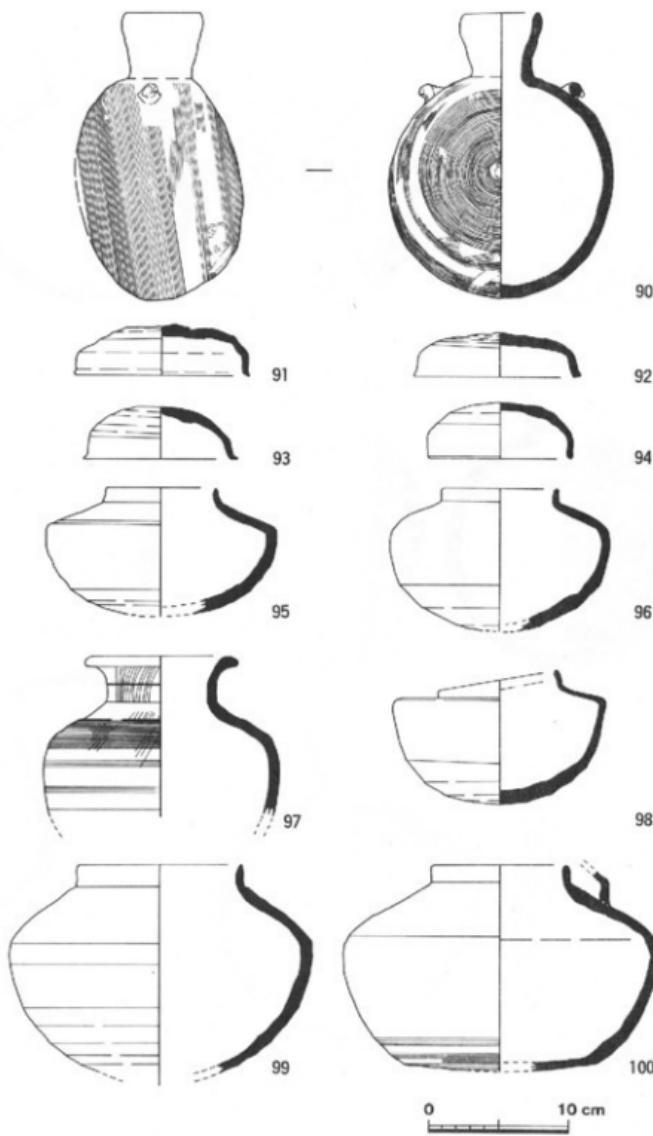
86

89

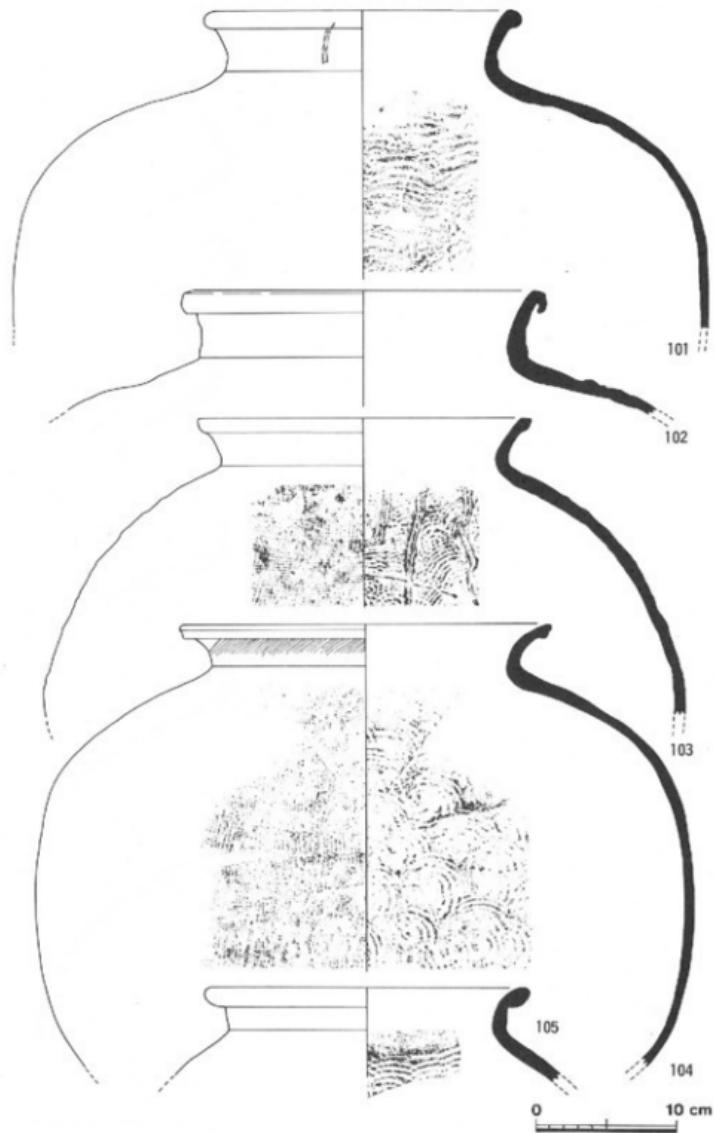


0 10 cm

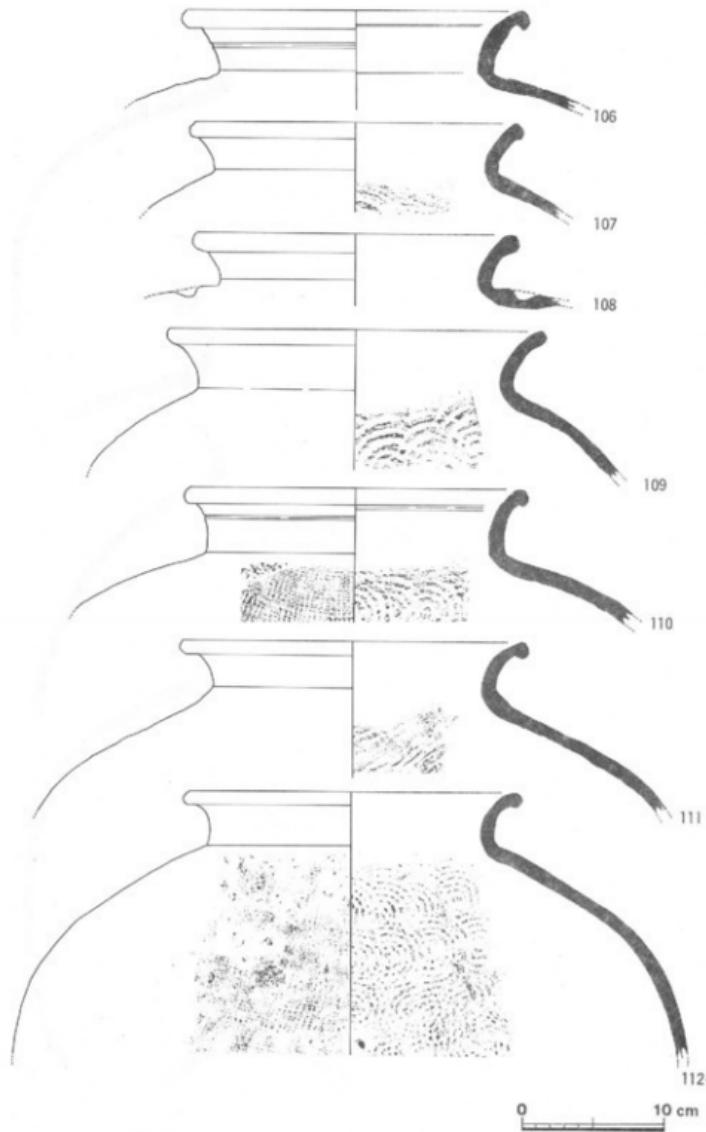
第7図 太満池南窯灰原出土遺物(4)



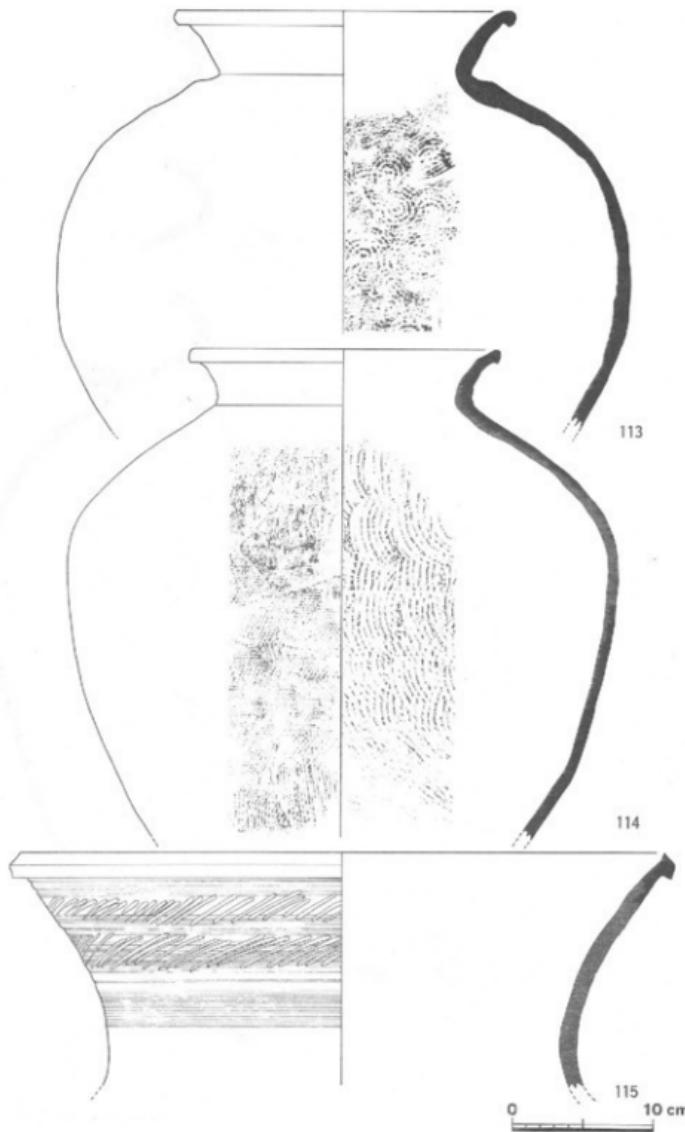
第8図 太満池南窯灰原出土遺物(5)



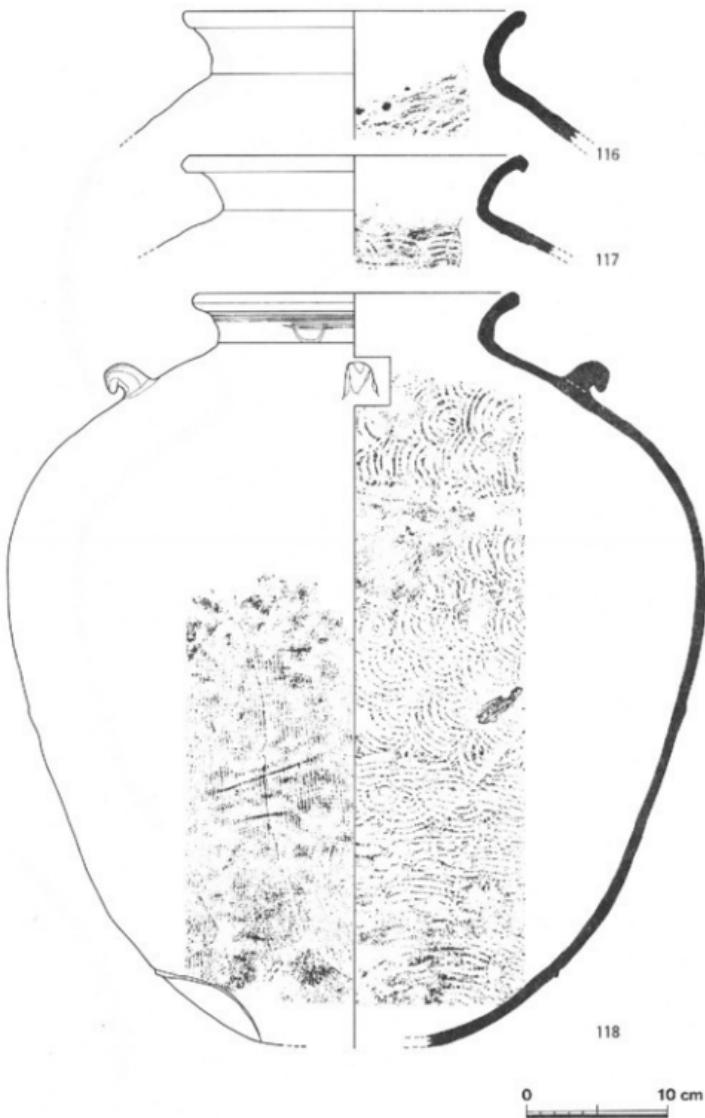
第9図 太満池南窯灰原出土遺物(6)



第10図 太満池南窯灰原出土遺物(7)



第11図 太満池南窯灰原出土遺物(8)



第12図 太満池南窯灰原出土遺物(9)

太満池89—2区

1.はじめに

今回の調査範囲は南北約15m・東西約11mに及ぶが、その大半は太満池が満水時には水没するため、調査区西側の大部分では調査時においても保水率が高く、非常に脆弱な泥土の堆積が厚く認められた。このために当該部分では全面掘削を行わず、試掘溝を設定して調査を行い、調査区東端の現在の池岸に相当する中位段丘崖上面南北約15m・東西約3mの範囲内で全面調査を行った。

2.近世遺構

(遺構)

現地表面より約0.5m下までは灰色シルト系の土層（整地層）が続き、この上層中には蓋杯や甕などの須恵器片・窯壁片・キセル・近世期の平瓦等が混入していた。現地表下約1mで灰黄色シルト層・灰褐色シルト層上面に達し、この面において溝および土坑を確認した。（第13図）

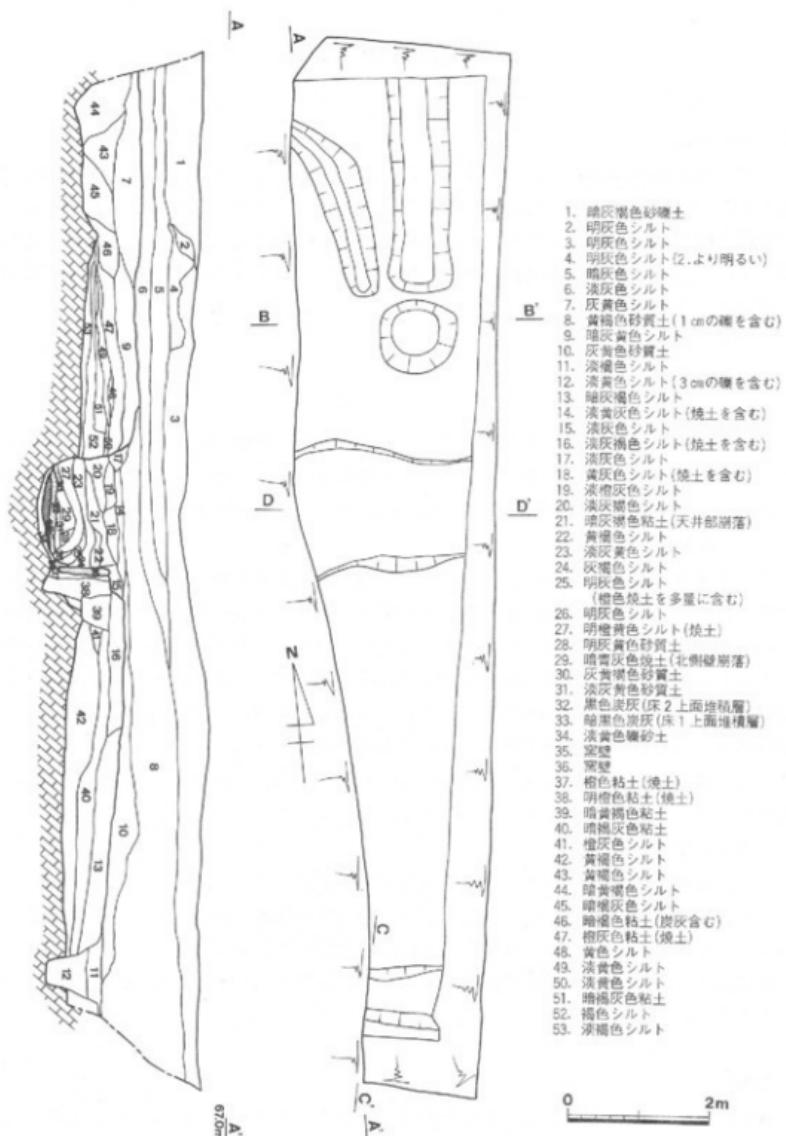
溝には調査区南端で東西にのびる溝1、調査区中央より北側で南北にのびる溝2、溝2西側で北北西にのびる溝3の計3本が存在する。溝1は上端幅約58cm・下端幅約34cm・深さ約32cmを測り、調査区内における長さは1.0mである。溝1底には、土師質甕が体部中位より上方を欠損して西側へ傾いた状態で設置されていた。溝2は上端幅約88cm・下端幅約48cm・深さ約40cm、調査区内における長さが3.0mを測る。溝3は上端幅約60cm・下端幅約16cm・深さ約40cm、調査区内における長さ2.6mを測る。

土坑は調査区中央より北側、溝2の南に位置し、上端径120cm・下端径84cmを測るほぼ真円形を呈し、深さは92cmを測る。底はほぼ平らである。この土坑はその形状より井戸などの用途を想定しうる。

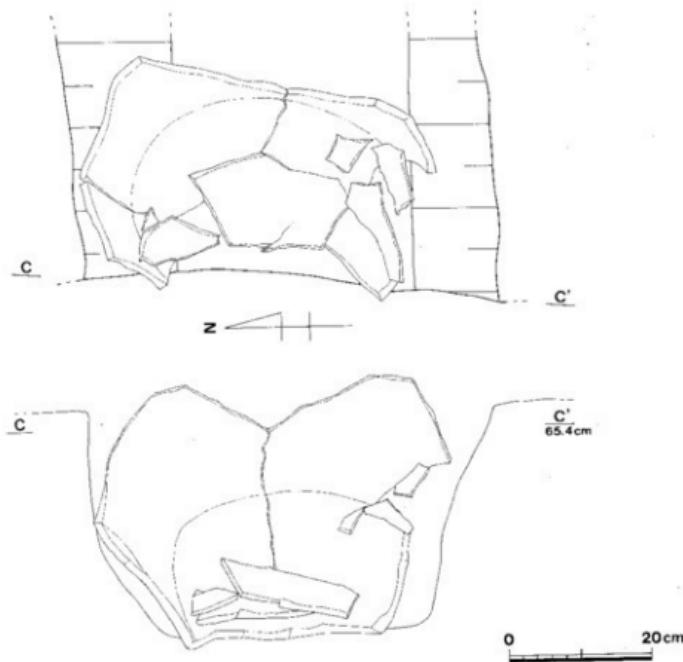
また、調査区中央においては、太満池北窯窓体部分の天井が崩落したことによって、その窯壁および窯壁に対応する落ち込みが、この近世遺構面で確認された。後述するように崩落した窯体天井部の上層、窓体内埋土には須恵器片の包含が認められるが、それ以後の遺物は含まないため、当該遺構面が機能していた時期においては既に現状を呈していたものと考えられる。

(遺物)

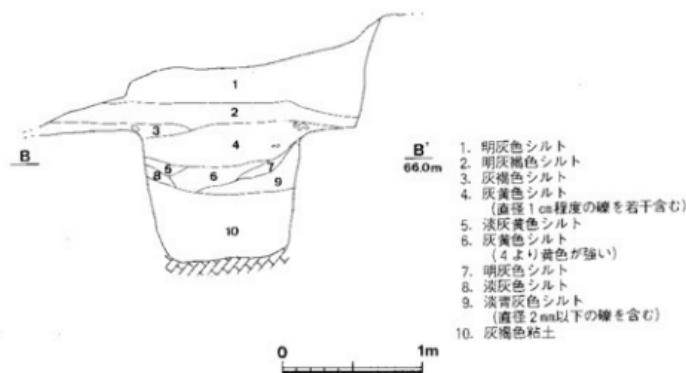
遺構面上層の整地層内から出土した遺物にキセル（煙管）（第16図上）がある。キセルは雁首とラウの一部のみが遺存し、吸口を欠損する。銅製。雁首残存長5.0cm・首部残存長4.3cm・脂返し長1.4cm・火皿径1.6cmを測る。首部は一本の管で形成され、ラウ接合



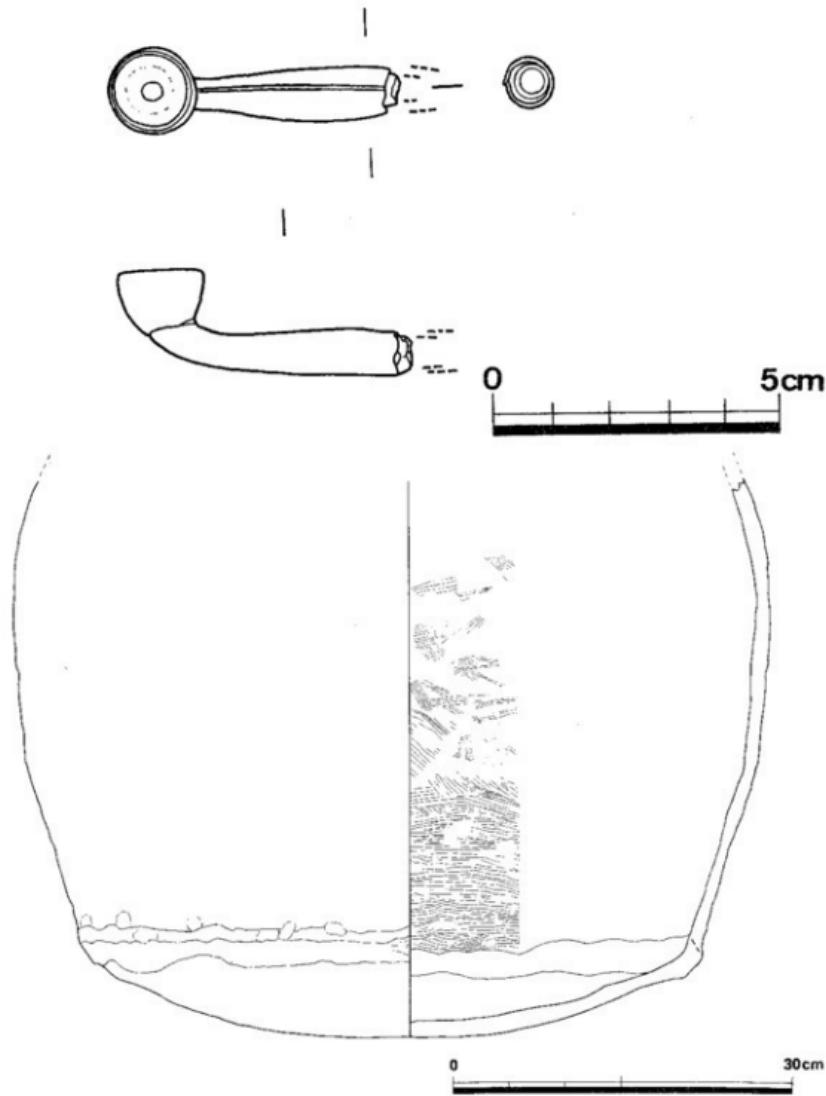
第13図 T I M89-2区、近世遺構・太満池北窯平面図



第14図 溝1土器出土状況



第15図 土坑土層断面図



第16図 近世遺構出土遺物

部へ向って緩く広がり、肩がない。首部成形時の接合痕が背面にみられ、その合わせ目は右側の板を上にしている。脂返しは緩やかに彎曲し、火皿と首部の接合部に接合痕が観察される。補強帶は付かない。このキセルの雁首は古泉弘氏の分類で雁首第Ⅱ類C^①に分類しうるものであり、氏によって江戸時代中期～後期に位置づけられている。

溝1出土の土師質甕（第16図下）は口縁部～体部中位より上方を欠損しており、底部径52.0cm・体部最大径67.6cm・残存高50.9cmを測る。体部外面は著しく磨耗しているために観察が困難であるが、体部外面はハケのちナデ消し、体部外面下方には縦方向のヘラ削りを施すようである。体部内面はハケ調整を施す。色調はにぶい黄橙色。胎土は密で、直径5mm以下の長石を含む。焼成はやや良。江戸時代後期の湊焼きであろう。

3. 太溝池北窯

（遺構） （第13図・第17図） （図版10・11・12・13）

太溝池北窯は太溝池東岸よりに位置し、旧天野川東岸の中位段丘崖に立地する。本窯はその窯体が露出していたために早くから遺存が知られており、「狹山町史」においても「窯番号1 太溝池A窯 時期Ⅲ期 窯が遺存」と記され、その写真も掲載されている。^② 本窯の調査開始前も、段丘崖における窯体南側壁および床の露出・遺存が顕著であった。（図版10-b）

近世遺構面直下および20cm下層において赤変箇所・焼土が観察されたため、段丘崖の露出部分に対応する窯体両側壁の検出に努めた。結果、調査区ほぼ中央に位置する本窯は、その主軸方向をN-82°-Wとし、ほぼ西に開口することが確認された。窯体幅は西側で上端幅約1.8m・下端幅約1.6m、東側で上端幅約1.5m・下端幅約1.3mを測り、奥から開口部に向けてやや広がっている。主軸方向の長さは調査区内では2.3mを測るが、さらに東側の鉄工所建物下へと窯体は続く。

窯壁は特に南側壁が良好に遺存し、残存高1.1mを測り、淡青灰色に還元している。現存部分でみると、窯壁は垂直なたわがりを示している。また、南側壁開口部付近では床面より50cm上方以上の部位で壁の貼替が一回分認められる。しかし、同窯壁の大部分においてはそれが確認できないためにこの貼替は部分補修的なものにとどまるものと思われる。北側壁はほぼ全面が内側に倒壊しており、還元されていない窯壁外側の落ち込み面をもって窯体北端を確認した。

また、天井部は当初床面より1.2m程の箇所に構築されていたものと推定しうるが、土圧によって床面より0.8m、窯体内埋土上に崩落した状態で検出された。これは細かく破碎していたため、除去した。

床面は地山を約60cm掘り込んだところに設けられており、2枚存在する。（第17図）下層の床1・上層の床2のそれぞれ上面には、かき出されて堆積した暗黒色・黒色の炭灰、およびその堆積層中からは破棄された須恵器が検出された。この堆積した炭灰の厚さは、

床1で約10cm、床2で約15cmである。床面のレベルは西側と東側で、床1が約30cm、床2が約28cmの高低差を示すが、全体的に緩やかな傾斜であり、傾斜変換点はさらに東側奥の調査区外に存在するものと想定される。これら炭灰の堆積状況および床面傾斜角から、当該部位は太溝池北窯の燃焼部であると考えるものである。

ところで、本窯の焚口は既に欠失しているが、この破壊はおそらく池の浸食作用等をその要因とするものと思われる。また、灰原の遺存については、本窯西端より西へ8mの範囲で東西方向のトレンチ、本窯西端より西へ8m地点で南北15mのトレンチ、本窯西端より西へ5m地点で南北15mのトレンチを設定して土層断面観察を行い、地山が急激な傾斜で落ち込む、全面調査区域より西へ約3mの範囲内で既にはば露出していた地山面を再確認したが、灰土層等を検出するに至らなかった。つまり、本窯の現在の西端より西へ10m以上離れた、冬季にも水が残る箇所の泥土下においては不明であるが、今回調査を実施した本窯西側120m²の範囲内には灰原は遺存しない。

調査区東端以東についてであるが、前述のように検出された窯体は燃焼部のみであり、なおも窯体は東方へと続き、焼成部が鉄工所建物下に遺存するものと思われる。しかしながら、当該地点における中位段丘崖・中位段丘面の遺存状況が不明であるに加えて、焼成部の崩落した天井部上層においてその埋土内から須恵器片・窯壁片が検出されることにより、焼成部は多少の破壊を受けているものと推察される。

(遺物) (第18図・第19図) (図版14・15)

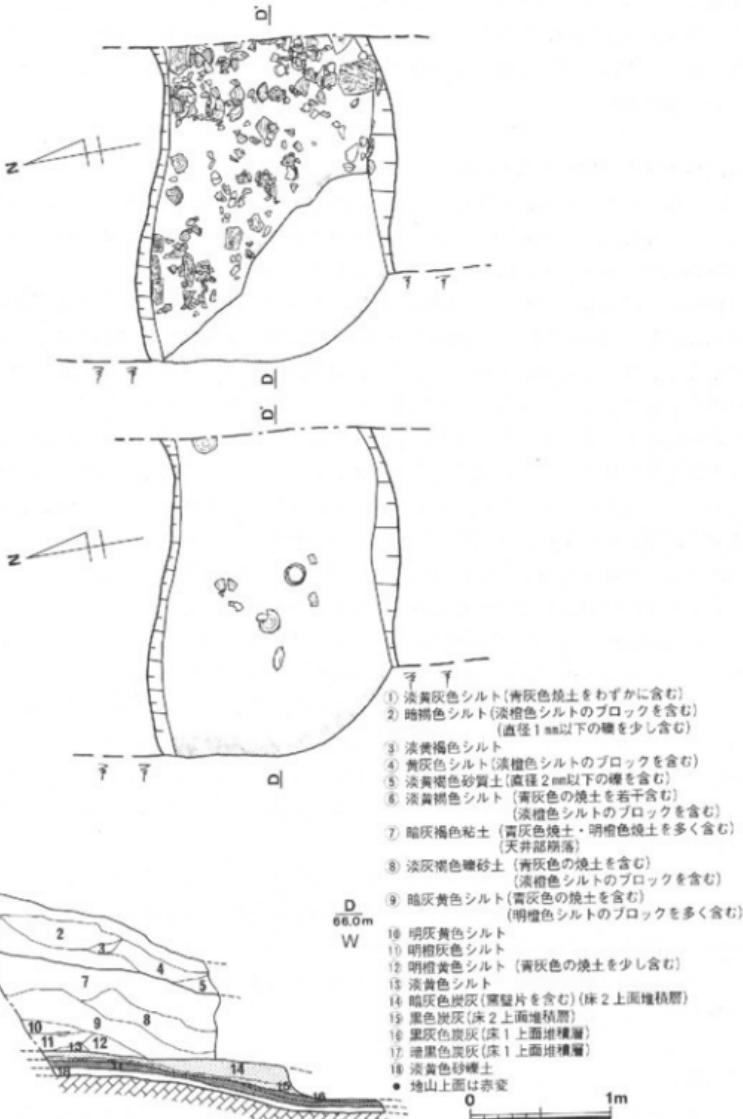
今回の調査で本窯から出土した須恵器の総量はコンテナ約7箱分である。窯体埋土内出土の須恵器には杯蓋・杯身・高杯・甕があるが、いずれも小片であるために図示しうるものが少なかった。よって、本報告では燃焼部床1・床2の堆積層内検出の須恵器のうち図示しうるもの、杯蓋・杯身・高杯・高杯蓋・短頸壺の計76点を掲載した。(第18図・第19図・第2表) 個々の資料については第2表で土器観察を行っているので、ここではその概ねを述べる。

a. 燃焼部床1堆積層出土遺物

床1堆積層からは杯蓋・杯身・甕が出土している。ここに図示したのは杯蓋3点・杯身3点である。(第18図1~6) (図版14 1~4)

杯蓋の口径は最大のもので14.5cm、最小のもので12.0cmを測り、その器高は最大のもので3.6cm以上、最小のもので2.8cmを測る。口縁端部の処理はやや丸くおさめるものと、やや鋭いものがある。天井部は2がやや低くやや丸いが1・3は低く平らもしくは平らに近い。口縁部は3点とも下外方に下っている。(第2表・第5表)

杯身の口径は最大のもので14.5cm、最小のもので12.0cmを測る。その器高は最大のもので4.0cm以上、最小のもので3.2cmを測る。たちあがり高は4・6が0.9cm、5が1.0cm



第17図 太満池北窯燃焼部
●平面図(遺物出土状況: 上一床2、中一床1)
●土層断面図(下)

を測る。口縁端部の処理は4・5がやや鋭いかもしくは鋭く、6は丸くおさめる。たちあがりは4・5が内傾したのち中位・端部付近で上方にのび、6が内傾してのびる。受部は外上方・水平にのび、底体部は3点とも平らに近く、4・6が浅めで5がやや深い。(第2表・第6表)

b. 燃焼部床2堆積層出土遺物

床2堆積層からは杯蓋・杯身・高杯・高杯蓋・短頸壺蓋が出土している。ここに図示したのは杯蓋24点・杯身39点・高杯1点・高杯蓋1点・短頸壺蓋5点の計70点である。

(第18図7~38・第19図39~76) (図版14 5~10・図版15 1~10)

杯蓋の口径は最大のもので16.8cm、最小のもので12.0cmを測り、その器高は最大のもので4.5cm以上、最小のもので3.2cmを測る。口縁端部の処理は、丸くおさめるものが20点、やや丸くおさめるものが4点を数える。口縁部が下外方に下るものは12点、下外方に下ったのち下方に下るものは5点、下外方に下ったのち垂直に下るものは2点、下外方に下ったのち外反するものは2点、下方に下るものは2点、下方に下ったのち下外方に下るものは1点を各々数える。天井部は高くやや丸いもの3点、やや高く平らなもの1点、やや低く丸い(やや丸い)もの5点、やや低く平らに近いもの3点、低くやや丸いもの1点、低く平らに近いもの4点、低く平らなもの6点を数える。(第2表・第7表)

杯身の口径は最大のもので15.3cm・最小のもので10.6cmを測る。その器高は最大のもので4.3cm、最小のもので2.4cmを測る。たちあがり高は最も高いもので1.2cm、最も低いもので0.5cmを測る。口縁端部の処理は丸くおさめるものが11点、やや丸くおさめるものが16点、やや鋭いものが8点、鋭いものが4点ある。たちあがりは内傾してのびるものが14点、内傾したのち中位で上方にのびるものが10点、内傾したのち中位で上内方にのびるものが2点、内傾したのち中位で直立するものが3点、内傾したのち低位で上方にのびるものが2点、内傾したのち低位で直立するものが1点、内傾したのち端部付近で上方にのびるものが6点、内傾したのち端部付近で直立するものが1点を各々数える。(第2表・第8表)

短頸壺蓋の口径は最大のもので12.3cm、最小のもので10.0cmを測る。器高は最大のもので3.6cm以上を測る。口縁端部は48・50・51が内傾する平面を成し、52がほぼ水平な平面を成し、53が丸くおさめる。口縁部は48が垂直に下ったのち外反し、50・52が下外方に下ったのち外反し、51が下外方に外反して下り、53は下外方に下ったのち内彎する。天井部は48がやや高いほかはやや低い。

(小結)

本窯の調査では、焼成部からかき出されて燃焼部に溜まつたと考えられる炭灰が、明確に2層確認したため、それぞれの炭灰堆積層直下の面が操業時の床面として機能したも

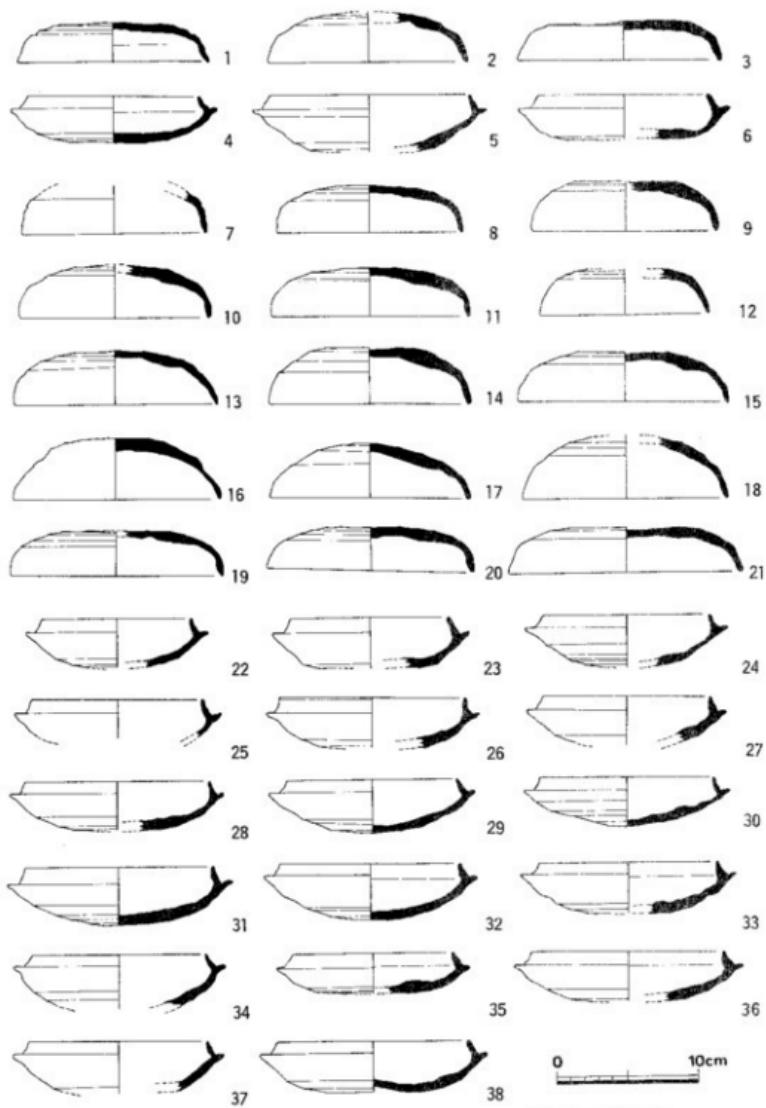
のと推定した。また、各々の炭灰層内においてはそれ以上の分層は不可能であった。このため、本窯では最低2回の操業（窯焚き）が行われたものと考える。

ゆえに、調査時には床面直上堆積層毎に須恵器の取り上げを試みたのであるが、床1上面堆積層内におけるその個体数が非常に少なかったため、床1上面堆積層内検出の須恵器と床2上面堆積層内検出の須恵器の形態等の対比を、数量的に良好な条件下で行うことができなかった。

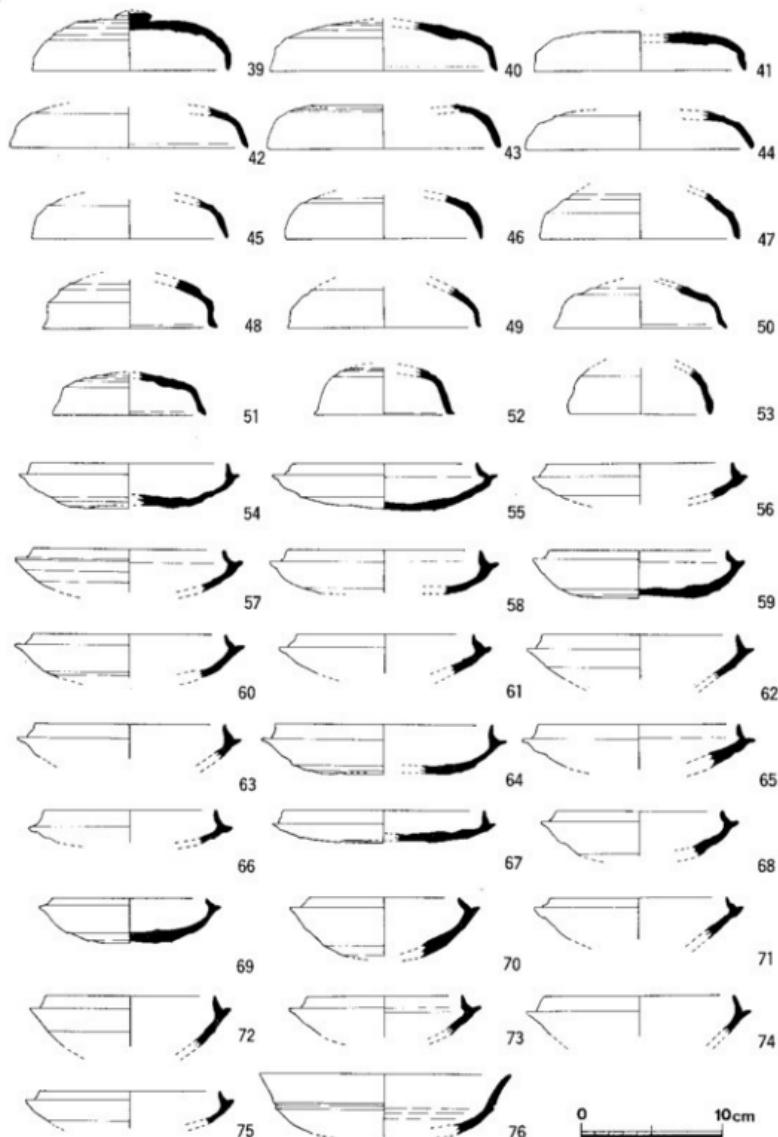
しかしながら、床1上面堆積層内検出の杯蓋・杯身はTK43型式⁽³⁾の範疇に収まるようであり、床2上面堆積層内検出の杯蓋・杯身は、口径が大きく底体部の深いものが多く見受けられ、TK43型式に比定しうるものと含むものの、その多くはTK209型式⁽³⁾の範疇に収められよう。

生産地においても消費地においても、TK43型式とTK209型式の須恵器が想像以上に混在して出土するように看取され、既報の窯跡発掘調査においても窯体毎および焼成床面毎、または灰原等の層序毎にTK43型式とTK209型式の須恵器を明確に分離しうる検出がなされた例は少ないようと思われる。⁽⁴⁾この太満池北窯燃焼部もそれと同様な状況を示す一資料として評価できようか。

- (1) 古泉 弘「江戸」『都立一橋高校地点発掘調査報告』1985年
- (2) 森 浩一「第一章第三節 土器の生産」『狭山町史』第一巻、本文編、1967年
- (3) 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」『平安学園考古学クラブ研究論集』第10号、1968年
- (4) TK43-I号窯においても、その焼成部最終床面上・灰原出土の須恵器にはTK43型式に比定しうるものとTK209型式に比定しうるもの双方を含むであろうことが、その報告書掲載出土遺物実測図・遺物写真から伺える。（大阪府教育委員会「陶邑V」『大阪府文化財調査報告書』第33輯、1982年）



第18図 太満池北窯出土遺物(1) (1~6: 燃焼部床1堆積層)
 (7~38: 燃焼部床2堆積層)



第19図 太満池北窯出土遺物(2)(燃焼部床2堆積層)

まとめ

今回の調査では太満池東岸に所在する2基の須恵器窯の発掘を実施した。狭山池とならんで大阪狭山市を代表する溜池である太満池が、埋め立てという形でその長い歴史に幕を閉じたのは痛恨の極みというべきであるが、埋め立てに先立つ発掘調査によって多くの成果を手にすることは不幸中の幸いであった。

今回の調査の結果、太満池東岸に位置する2基の須恵器窯跡はほとんど同時期に営まれていたことが確認できた。またそれらの窯のうち北窯においては杯と甕の出土が目立ち、南窯からは高杯、醤等多彩な器種が出土している。隣接して所在する同じ時期の窯の遺物にこのような差異がみられることは、窯間で機能の差があったことを感じさせる。

大阪狭山市は陶邑窯跡群の西端に位置しており、市内でもこれまでに約80箇所の須恵器窯が確認されている。その大半は分布調査によって所在を確認されただけのものであり、その詳細については今後の調査の結果を待たなければならないのであるが、その限定された知見によれば、本市の須恵器窯は今回発掘された2基の窯と同時期のものが圧倒的に多いといえる。なぜこの時期に多くの須恵器窯がこの地に営まれたのか、そして須恵器の生産に従事した工人たちは一体どこに住んでいたのか、発掘成果を地域史に昇華する段階での多くの謎はいまだ残されたままである。今後は発掘調査によって市内の須恵器窯の全容を明らかにするとともに、その保存、有効利用についても努力を重ねていきたい。

遺物觀察表

第1表 太溝池南窯出土遺物觀察表

第2表 太溝池北窯出土遺物觀察表

器種	闊面 圓版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	10-IIl 8-4	口徑 26.6 基部径 20.4 残存高 12.0	口頭部は外向して上外方に開き、口縁部下で外下方にのびたのち、口縁部は内向して上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に内弯して下る。底部・体部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外面、タタキ。 肩部内面、青海波タタキ。 他は回転ナテ調整。	色調：灰色。 胎土：密。2mmの白色砂粒を含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/3。反転復元。外面の一部に土器片接着。内外面に自然釉付着。
甕	10-II2 8-5	口徑 23.4 基部径 21.2 残存高 19.0	口頭部は上方にのびたのち外向して上方にのび、口縁部下で外方にのび、口縁部は内向して上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に下り、体部は下方に内弯して下る。底部・体部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口頭部外面1/4、カキ目調整。肩部・体部外面、タタキのち、カキ目調整。肩部・体部内面、同心円タタキ。 他は回転ナテ調整。	色調：灰色。 胎土：密。2mmの白色砂粒を含む。焼成：良好。残存：1/6。反転復元。
甕	11-II3 8-6	口徑 24.2 基部径 18.2 体部最 大径 41.4 残存高 30.0	口頭部は上外方に開いてのび、口縁部下で外方に下り、口縁部は内弯して上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に内弯して下る。底部は下方に内弯して下る。底部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部・体部外面、タタキ。 肩部・体部内面、同心円タタキ。 他は回転ナテ調整。	色調：灰色。 胎土：密。2mmの白色砂粒を含む。焼成：良好。残存：1/3。反転復元。
甕	11-II4 8-7	口徑 21.8 基部径 18.6 体部最 大径 39.7 残存高 35.0	口頭部は外向して上外方にのび、口縁部はやや上方にのびたのち内弯し、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に内弯して下り、体部はやや下方に内弯して下り、底部は下外方に内弯して下る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部・体部・底面部外、タタキのち、カキ目調整。 肩部・体部・底部内面、青海波タタキ。 他は回転ナテ調整。	色調：内一灰、外一暗灰色。 胎土：密。2mmの白色砂粒を含む。焼成：良好。残存：2/5。外面に自然釉付着。
甕	11-II5 8-7	口徑 46.6 残存高 16.5	口頭部は外反して上方にのび、口縁部下で外下方にのび、口縁部はやや上外方にのびたのち、内傾する顔面を成す。端部はやや競い。1/2ト方で2条のあまい線縁を3箇めぐらし。その間に横描き斜行泥繪文を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口頭部外面2/3、カキ目調整。 他は回転ナテ調整。	色調：内一灰色、外一暗灰色。 胎土：密。1mmの白色砂粒を含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/7。口頭部以外は欠損。反転復元。外面一部に自然釉付着。
甕	12-II6 8-7	口徑 24.4 基部径 20.8 残存高 9.2	口頭部は外向して上方・上外方にのび、口縁部は内弯して上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部はやや外下方に下る。底部・体部・肩部一部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外面、タタキ。 肩部内面、青海波タタキ。 他は回転ナテ調整。	色調：灰色。 胎土：密。1mmの白色砂粒を含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/3。反転復元。外面に自然釉付着。
甕	12-II7 8-8	口徑 23.8 基部径 19.2 体部最 大径 50.6 残存高 6.6	口頭部は外向して上外方にのび、口縁部下で外下方にのび、口縁部は上方にのびる外傾する平面を成したのち内傾し、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に下る。底部・体部・肩部一部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外面、タタキ。 肩部内面、同心円タタキ。 他は回転ナテ調整。	色調：暗灰色。 胎土：密。1mmの白色砂粒を若干含む。焼成：良好。残存：口頭部の1/5。反転復元。外面に自然釉付着。
甕	12-II8 8-8	口徑 23.4 基部径 19.8 体部最 大径 50.6 残存高 54.3	口頭部は外向して垂直・上外方にのび、口縁部は内弯して上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に、体部は内下方に、底部は内下方に内弯して下る。肩部で4万回向に、下方へ傾曲する把手を付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口頭部外面1/2、カキ目調整。肩部・体部外面、タタキのち、カキ目調整。底部外面、タタキ。肩部・体部・底部内面、同心円タタキ。 他は回転ナテ調整。	色調：青灰色。胎土：密。2mmの白色砂粒を含む。焼成：良好。残存：5/9。ヘラ記号：頸部外面に「サ」がある。底部外面に蓋杯の接着痕あり。肩部・体部外面自然釉付着。

太満池北窯

第2表

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 蓋	18- 1 14-	口径 器高 2.9	口縁部はやや下方に下つたのち外方に下る。端部はやや丸くおさめる。天井部底部境界に鋸い凹線がめぐる。天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面5/6、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。2mmの白色砂粒を若干含む。 焼成：良好。 残存：2/5。反転復元。
同 上	18- 2 14- 1	口径 残存高 3.6	口縁部は外方に下り、端部はやや丸くおさめる。天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面5/7、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰青色。 胎土：密。1mmの白色砂粒を多く含む。 焼成：良好。残存：1/3。反転復元。底部外表面土器片着着、内面灰かぶり。
同 上	18- 3 14- 2	口径 器高 2.8	口縁部は外方に下り、端部はやや鋸い。天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面5/7、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2mmの白色砂粒を含む。 焼成：良好。 残存：7/8。
杯 身	18- 4 14- 3	口径 受部径 器高 3.5 たちあ がり高 0.9	たちあがりは内傾したのち、中位でやや上方にのびる。端部はやや鋸い。受部は外上方にのび、端部はやや鋸い。底部はやや浅くほほ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面6/7、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2mmの白色砂粒を含む。 焼成：良好。残存：4/5。 底部内面一部灰かぶり。
同 上	18- 5 14-	口径 受部径 残存高 1.0	たちあがりは内傾したのち、端部付近でやや上方にのびる。端部は鋸い。受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。底部はやや深くほほ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面3/4、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2mmの白色砂粒を含む。 焼成：良好。 残存：1/3。反転復元。
同 上	18- 6 14- 4	口径 受部径 残存高 0.9	たちあがりは内傾してのび、端部は丸くおさめる。受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。底部は浅く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面5/6、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。1mmの白色砂粒を含む。 焼成：良好。 残存：1/3。反転復元。
杯 蓋	18- 7	口径 残存高 3.0	口縁部はやや下方に下り、端部は丸くおさめる。天井部底部境界に鋸い凹線がめぐる。天井部欠札。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面9/10、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：密。0.5mmの白色砂粒を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/12。反転復元。
同 上	18- 8	口径 器高 3.4	口縁部は外方に下ったのち、下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面5/6、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗青灰色。 胎土：密。1mmの白色砂粒を含む。 焼成：良好。残存：2/5。反転復元。内面一部隔壁片付着。
同 上	18- 9	口径 器高 3.5	口縁部は外方に下ったのち、垂直に下る。天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面5/6、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2mmの白色砂粒を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/5。反転復元。
同 上	18-10 14- 5	口径 残存高 3.9	口縁部は外方に下ったのち、垂直に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面5/6、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：青灰色。 胎土：密。2mmの白色砂粒を多く含む。 焼成：良好。 残存：2/3。反転復元。

器種	國面 國版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
杯 蓋	18-11	口径 器高	14.2 3.4	口縁部は下方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面6/7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。1mmの白色砂粒を多く含む。 焼成：良好。残存：1/2。反転復元。外側一部土器片接着。
同 上	18-12	口縁 残存高	12.0 3.2	口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5/6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。1mmの白色砂粒をわずかに含む。 焼成：良好。残存：1/8。反転復元。
同 上	18-13	口縁 器高	14.3 3.9	口縁部は下外方に下った のち下方に下る箇所と下 外方に下る箇所がある。 端部は丸くおさめる。天 井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面6/7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。胎土：密。2mmの白色砂粒を含む。焼成：良好。残存：3/4。ヘラ記号：天井部外面に「V」がある。外面自然積付着。
同 上	18-14	口縁 器高	14.2 3.9	口縁部は下外方に下り、 端部は丸くおさめる。 天井部はやや高く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面9/10、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：青灰色。 胎土：密。2mmの白色砂粒を含む。 焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
同 上	18-15	口縁 器高	15.2 3.5	口縁部は下外方に下った のち内旁して垂直に下り、 端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面6/7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：やや密。3mmの白色砂粒を多く含む。 焼成：良好。残存：2/3。
同 上	18-16	口縁 器高	14.8 4.3	口縁部は下外方に開いて 下り、端部は丸くおさめ る。 天井部は高くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：明灰青色。天井部外面一部－明灰色。胎土：密。2mmの白色砂粒を若干含む。 焼成：良好。残存：5/7。
同 上	18-17	口縁 器高	14.2 4.0	口縁部は下外方に下り、 端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。1mmの白色砂粒を若干含む。 焼成：良好。残存：1/2。
同 上	18-18	口径 残存高	14.6 4.5	口縁部は下外方に下り、 端部は丸くおさめる。 天井部は高くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面4/5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：青灰色。 胎土：密。3mmの白色砂粒を含む。 焼成：良好。残存：1/6。反転復元。
同 上	18-19	口縁 器高	14.9 3.2	口縁部は下外方に下った のちやや下方に下り、端部は やや丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面7/8、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：青灰色。 胎土：密。1mmの白色砂粒をわずかに含む。 焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
同 上	18-20	口径 器高	14.7 3.2	口縁部は下外方に下った のちやや下方に下り、端部は やや丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面5/6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナナ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。胎土：密。3mmの白色砂粒を含む。焼成：良好。残存：3/4。ヘラ記号：天井部外面に「一」がある。天井部底部境界に上器片接着。

遺物形態分類表

第3表 太満池南窯杯蓋形態分類表

第4表 太満池南窯杯身形態分類表

第5表 太満池北窯燃燒部床1杯蓋形態分類表

第6表 太満池北窯燃燒部床1杯身形態分類表

第7表 太満池北窯燃燒部床2杯蓋形態分類表

第8表 太満池北窯燃燒部床2杯身形態分類表

太満池南窯杯身形態分類表

第4表

口縁端部	たちあがり	受 部	受部端	底 体 部	個数
丸 く おさめる	上方にのびる	やや外上方	丸 く おさめる	浅い	1
	中位で上方にのびる	ほぼ水平		浅くほぼ平ら	1
	中位で直立する	上外方		やや深い	1
		上外方		浅くやや丸い	1
	低位で上方にのびる	上外方に短く		浅くやや丸い	1
		やや外上方		やや深い	1
	端部付近で上方にのびる	外上方		浅く平ら	2
		やや外上方		浅くほぼ平ら	1
	端部付近で上方にのびる	外上方		やや深く丸い	1
やや丸く おさめる	内 傾	上外方	やや丸く おさめる	やや深くほぼ平ら	1
		ほぼ水平		やや浅くほぼ平ら	1
	中位で上方にのびる	外上方		浅く平ら	1
	端部で上方にのびる	やや外上方		浅く平ら	1
	端部付近で上方にのびる	ほぼ水平		やや深くほぼ平ら	1
	内 傾	ほぼ水平		やや深い	1
錐 い	内傾し短くのびる	ほぼ水平	丸 く おさめる	浅く平ら	1
	端部付近で上方にのびる	やや外上方		やや浅くほぼ平ら	1
	内 傾	ほぼ水平		やや深くやや丸い	1
やや銳い	上方にのびる	外上方	丸 く おさめる	やや深くほぼ平ら	1
				浅くほぼ平ら	1
	中位で上方にのびる			やや深くやや丸い	1
				浅く平ら	1
	端部で上方にのびる	ほぼ水平		浅く若干丸い	1
	内 傾	水平	やや銳い	浅くほぼ平ら	1
		上外方		やや深く丸い	1
	端部付近で上方にのびる	外上方		やや深くやや丸い	1
	端部付近で直立する	外上方		やや浅く平ら	1
	内 傾	やや外上方		浅くほぼ平ら	1

太満池北窯燃焼部床1杯蓋形態分類表

第5表

端 部	口 縁 部	大 井 部	個 数
やや丸く おさめる	下方に下ったのち下外方に下る 下外方に下る	低く平らに近い やや低く やや丸い	1 1
やや鋭い	下外方に下る	低く平ら	1
丸く おさめる	_____	_____	0
鋭い	_____	_____	0

太満池北窯燃焼部床1杯身形態分類表

第6表

口縁端部	た ち あ が り	受 部	受 部 端	底 体 部	個 数
丸く おさめる	内 傾	やや外上方	丸く おさめる	浅く平ら	1
鋭い	端部付近で上方にのびる	水 平	丸く おさめる	やや浅く ほぼ平ら	1
やや鋭い	中位で上方にのびる	外上方	やや鋭い	やや浅く ほぼ平ら	1
やや丸く おさめる	_____	—	—	—	0

太満池北窯燃焼部床 2杯蓋形態分類表

第7表

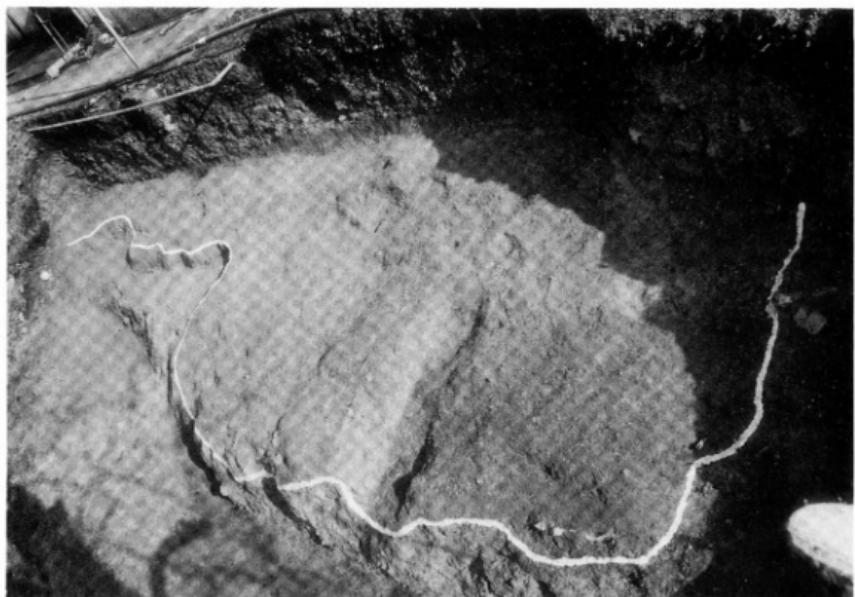
端 部	口 緑 部	天 井 部	個 数
丸くおさめる	下方に下る	低く平らに近い	1
		欠損	1
	下外方に下る	高くやや丸い	2
		やや高く平ら	1
		低く平ら	2
		低く平らに近い	2
		やや低く平らに近い	1
		やや低く丸い	1
		やや低い	1
	下外方に下ったのち下方に下る	低くやや丸い	1
		低い	1
		やや低くやや丸い	1
	下外方に下ったのち垂直に下る	やや低くやや丸い	1
	下外方に下ったのち内弯し垂直に下る	低く平ら	1
	下外方に下ったのち端部でわずかに外反	やや低い	1
	下外方に下ったのちやや外反	低く平ら	1
	やや内弯して下外方に下る	高い	1
やや丸くおさめる	下方に下ったのちやや下外方に下る	やや低くやや丸い	1
	下外方に下ったのち下方に下る	低く平ら	1
	下外方に下ったのちやや下外方に下る	やや低くやや丸い	1
やや鋭い	—————	—————	0
鋭い	—————	—————	0

太満池北窯燃焼部床 2杯身形態分類表

第8表

口縁端部	たちあがり	受 部	受部端	底 体 部	個 数	
丸く おさめる	中位で上内方にのびる	外上方	丸く おさめる	浅い	1	
	中位で上方にのびる			浅くほぼ平ら	1	
	中位ではば直立する	水平		浅い	1	
	低位で上方にのびる			浅い	1	
	端部付近で上方にのびる	上外方		やや深くほぼ平ら	1	
	内弯する	外上方		浅く平ら	1	
	中位で上内方にのびる	外上方		欠損	1	
	内傾	ほぼ水平	やや丸く おさめる	浅くほぼ平ら	1	
				やや深く丸い	1	
		外上方		やや浅い	1	
やや丸く おさめる	中位で上方にのびる	やや外上方	丸く おさめる	やや浅くほぼ平ら	1	
	中位で直立する	外上方		やや深い	1	
	端部付近で上方にのびる	やや外上方		やや浅い	1	
	内傾	ほぼ水平		浅く平ら	1	
		外上方		深い	1	
		上外方		やや深い	1	
	中位で上方にのびる	外上方	やや丸く おさめる	深い	1	
	上外方	上外方		やや浅くほぼ平ら	1	
	中位で直立する	上外方		やや浅くほぼ平ら	1	
	低位で直立する	水平		やや浅くほぼ平ら	1	
	内傾	ほぼ水平に短く		やや浅くやや丸い	1	
		外上方		浅くやや丸い	1	
		上外方		やや深い	1	
銳い	中位で上方にのびる	ほぼ水平	やや鋭い	浅い	1	
	上外方	上外方		やや深い	1	
	内傾	外上方	丸くおさめる	浅い	1	
	中位で上方にのびる	ほぼ水平に短く	鋭い	浅く平ら	1	
やや鋭い	端部付近で上方にのびる	外上方	やや鋭い	浅く若干丸い	1	
	内傾	やや上外方		やや浅い	1	
		水平にのびる		欠損	1	
	端部付近に上方にのびる	外上方	やや丸く おさめる	やや浅くやや丸い	1	
	内傾	ほぼ水平		浅い	1	
	端部付近で直立する	水平		やや深くやや丸い	1	
	内傾	外上方	やや鋭い	やや浅くほぼ平ら	1	

図版



a. 太溝池南窯灰原



b. 太溝池南窯灰原土層斷面



a. 太満池南窯灰原



b. 太満池南窯



1



2



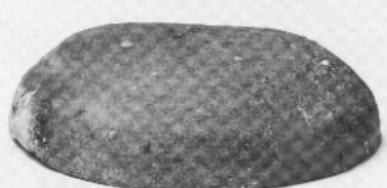
3



4



5



6



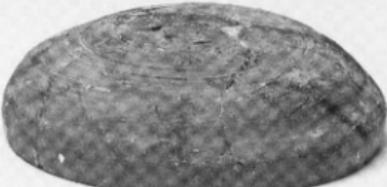
7



8



9



10

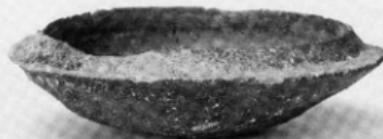
太溝池南窯灰原出土遺物(1)



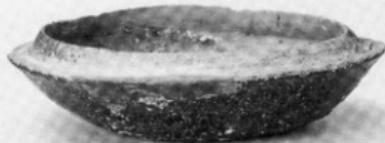
1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

太溝池南窯灰原出土遺物(2)



太満池南窯灰原出土遺物(3)



1



2



3



4



5



6

太溝池南窯灰原出土遺物(4)



1



2



3



4



5



6

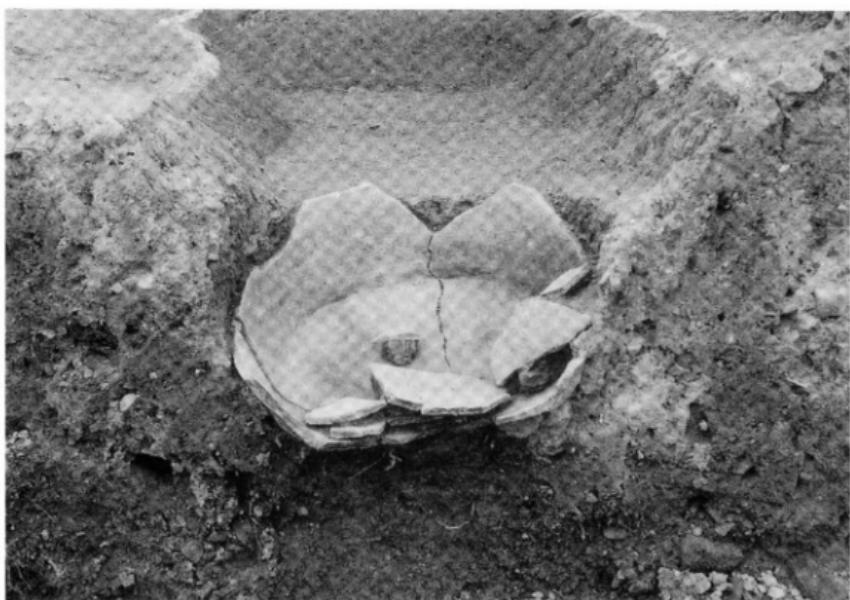


7

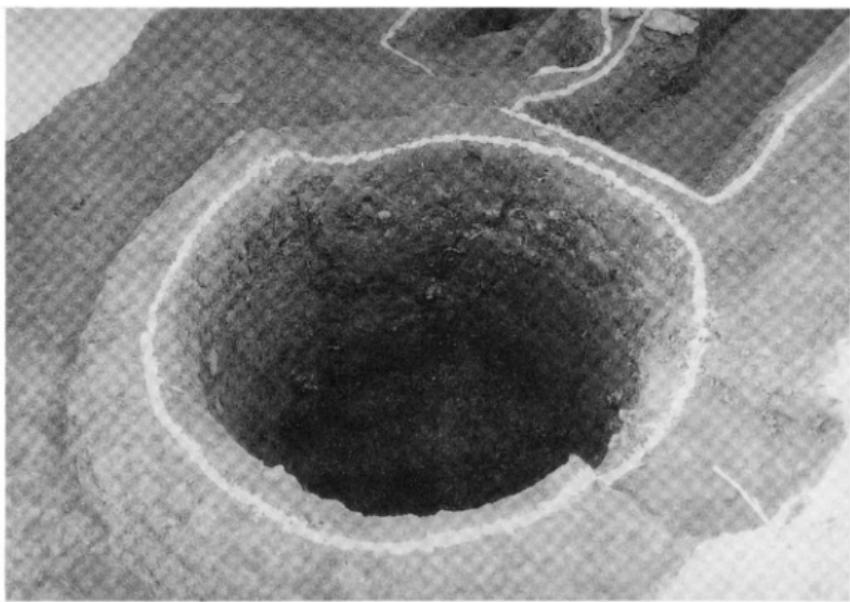
太溝池南塗灰原出土遺物(5)



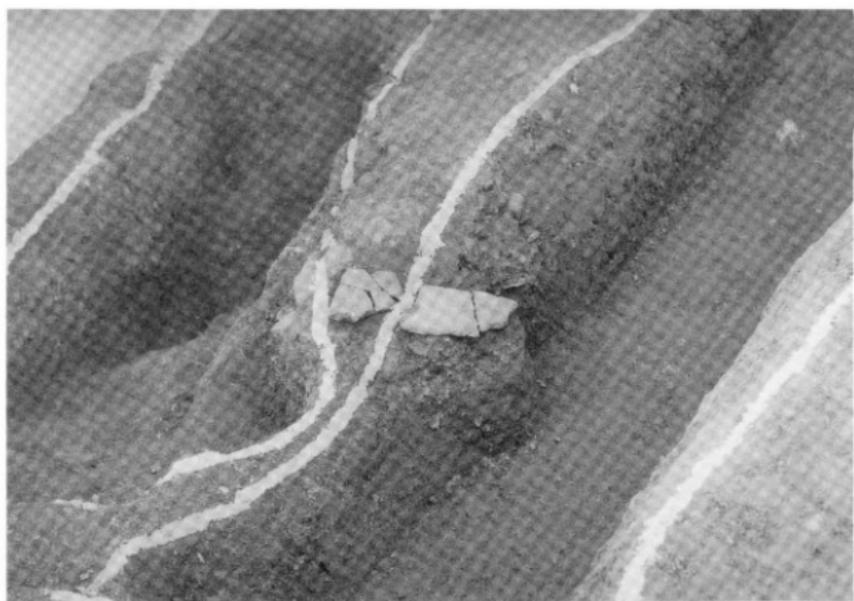
太满池南窑灰原出土遗物(6)



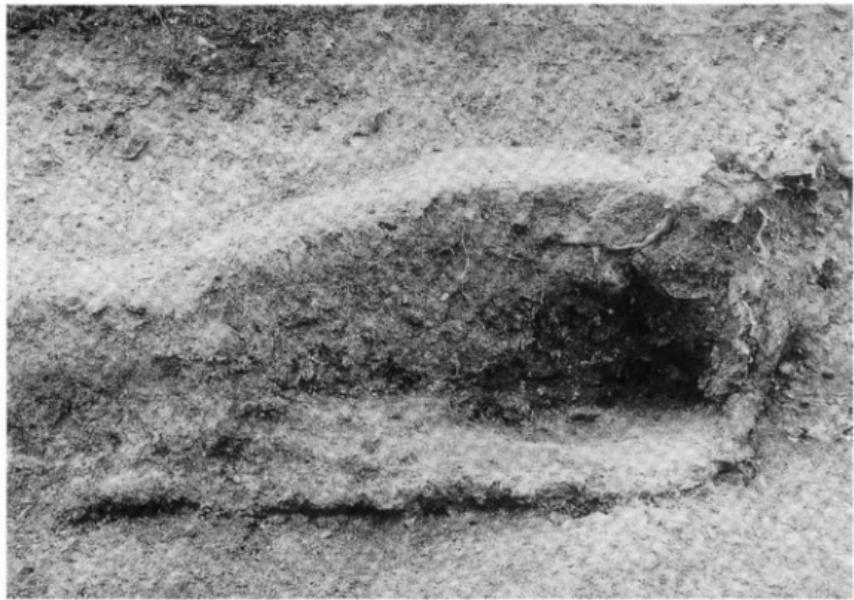
a. 近世遺構 溝1土器出土狀況



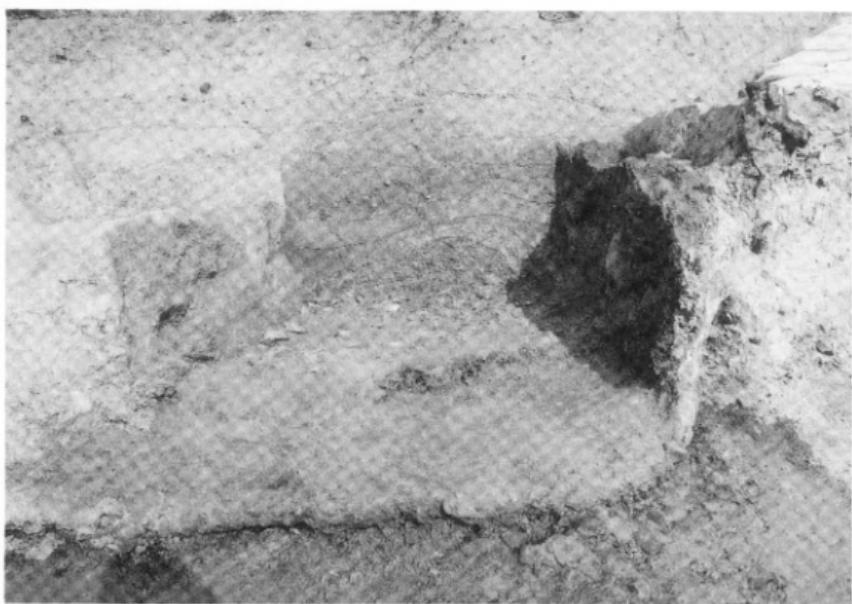
b. 近世遺構 土坑



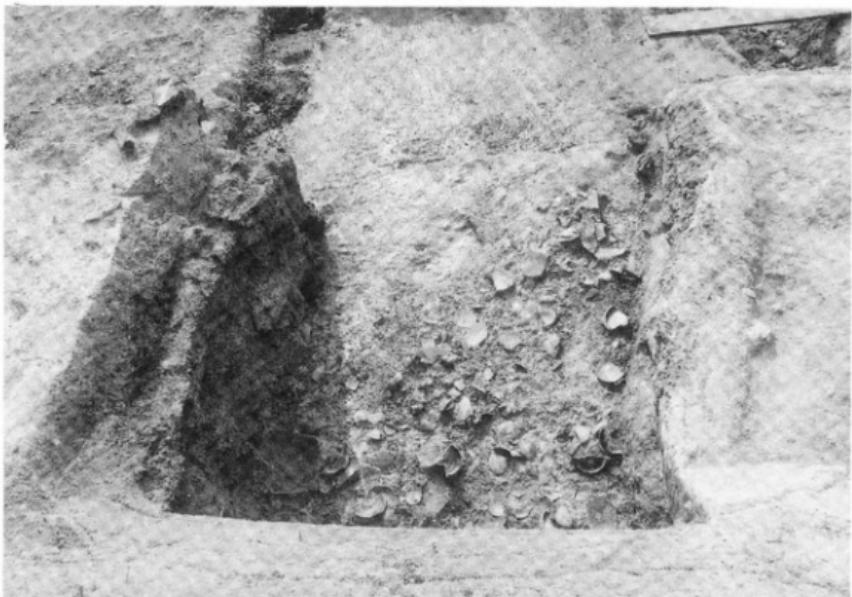
a. 近世遺構 溝2・溝3



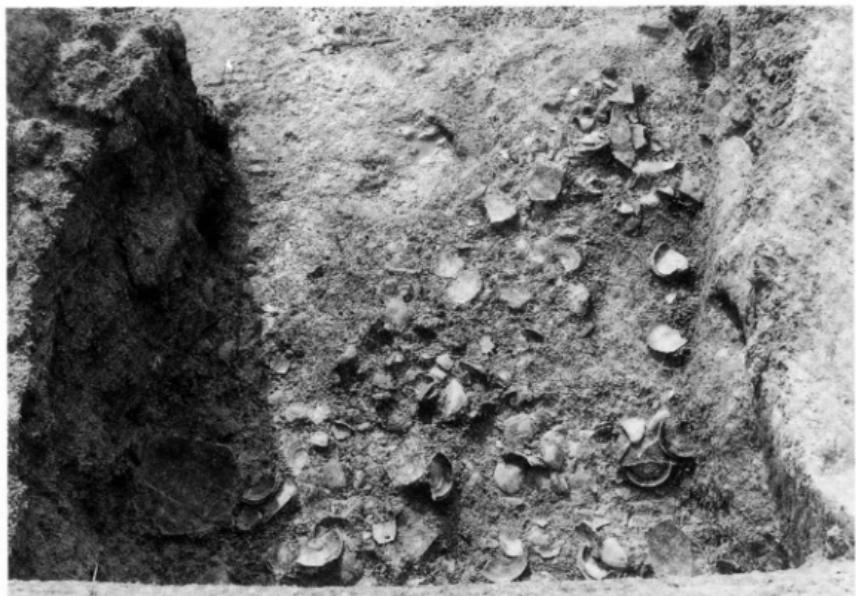
b. 太溝池北窯燃焼部（調査前）



a. 太満池北窯燃焼部（床2直上）



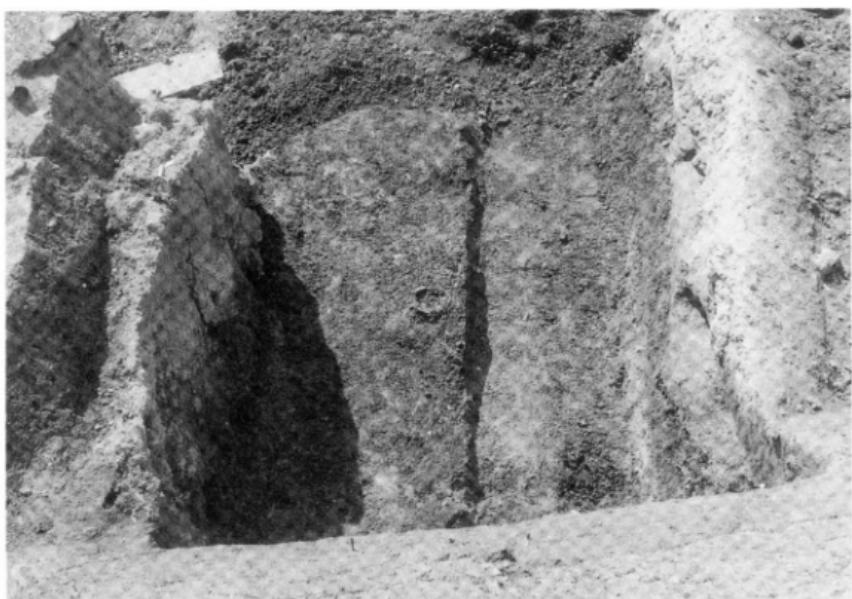
b. 太満池北窯燃焼部（床2直上、東上方より）



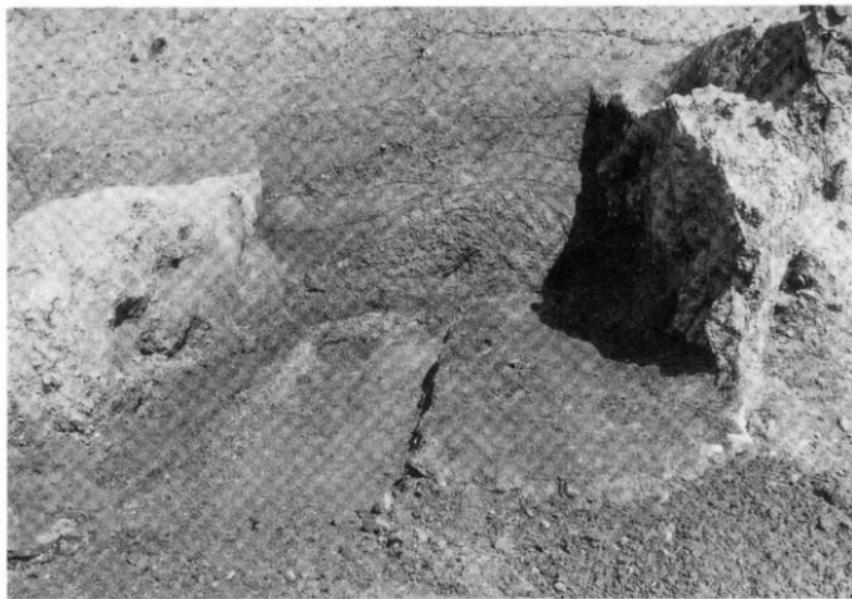
a. 太溝池北窯燃焼部床 2 遺物出土状況（東上方より）



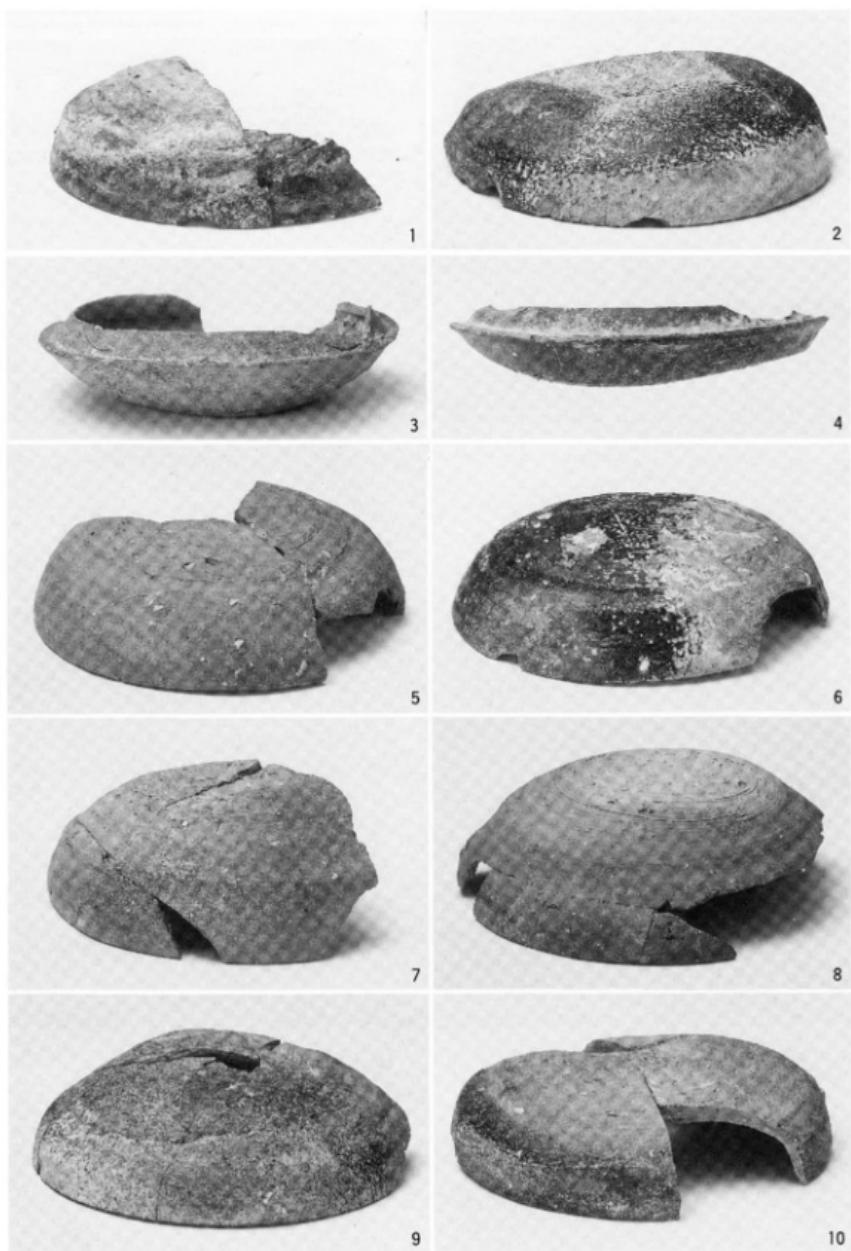
b. 太溝池北窯燃焼部床 2 遺物出土状況（北より）



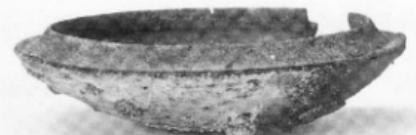
a. 太溝池北窯燃焼部（床 I 直上・半掘、東上方より）



b. 太溝池北窯燃焼部（床 I 直上・半掘）



太溝池北窯燃燒部出土遺物(1)
(1~4:床1、5~10:床2)



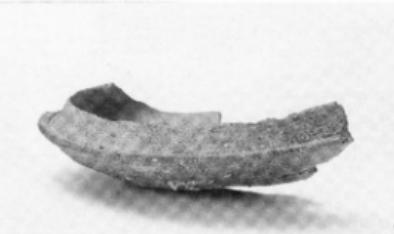
1



2



3



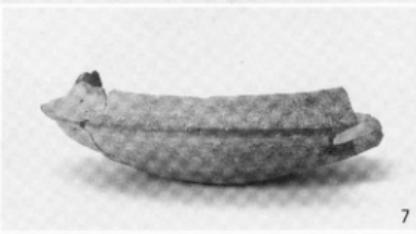
4



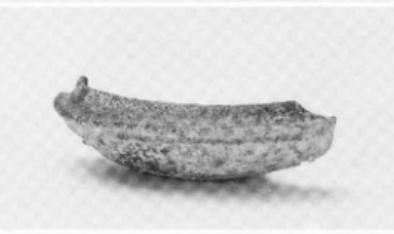
5



6



7



8



9



10

太満池北窯燃燒部出土遺物(2)
(床2出土)

大阪狭山市文化財報告書5

太満池南窯・北窯 発掘調査報告書

発行日 平成3年3月31日

発行 大阪狭山市教育委員会

印刷 橋本印刷株式会社

